
猫とワルツを

オウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫とワルツを

【Nコード】

N3115Y

【作者名】

オウル

【あらすじ】

エミリア騎士団で新しく発足することになった第12旅団。傭兵上がりの副長さんが、上官のボクっ娘にツンデラれたりヤンデラれたりしながらも必死で部隊を運営する面白くも、涙なしでは語れないお話。

設定には色々穴がありそうです。その辺り大目に見ていただけますと助かります。

この作品は某大型掲示板でも掲載されてます。

第1話 猫団長始動！

「おい、レオ、聞いているか？」

「ああ…？」

団長が呼んでいる。

いかん、考え事をしていたようだ。

俺の名前は、レオンハルト・ベッカー。このエミールア騎士団でこの度、新しく設立された旅団クラスの部隊の副長に任命されたばかりだ。

「いつもボクの三步後ろを歩けって言ってるだろう！」

うるさいな…。小さ過ぎて見えなかったんだよ。賢い俺はその言葉を読み込んだ。まだ命は惜しい。

目の前で喚き散らしている小さい彼女はアキラ・キサラギ。第1旅団の団長。まあ…俺の直接の上官に当たる人物だ。

「お前は、ボクの言うことさえ聞いていればいいんだ……。おい、聞いているのか！」

「はいはいはい！ 聞いてます！ 聞いてますってば！」

「返事は一度でいい！ 大体、お前は軽すぎるんだ！ 会議の最中、お前が何度、あの薄汚いメイドに目をやったか、ボクが気付いてないとも思っているのか！」

薄汚いって……。あのメイドは、あんたと同じ下級貴族の出身でしょうが……。

「傭兵上がりか…」

吐き捨てて、団長は歩き出す。

…その傭兵上がりを副長に抜擢したのは自分だろうに。

それにしても…あの娘、可愛かったなあ。あー、犬の獣人の血を引いてるな。いい身体してた…きつと、夜もいい声で鳴くんだらうなあ…。

「おい！ お前、今、何を考えている！」

「うわあ！ 何も考えてません、ごめんなさい！」

「何も考えてないだとお…？ お前、今の自分の立場が分かっているのか！？」

団長は怒鳴り散らしながら俺に詰め寄る。背伸びしても胸ほどまでしかない。癖のある猫っ毛を怒りに巻き上がらせながら言った。

「この、うすらとんかちめ…」

俺が騎士の叙勲を受けたのは3年前。式の中で、あまりの退屈さに欠伸したところを、このアキラ・キサラギに見咎められたのが運の尽きだ。その後、修正という名の私的暴行を受け、騎士としての基本的な礼儀作法…まあ、戒律だな。そいつを身に付けるために彼女の側近として仕えることになった。

それから3年…現在もって修行中の身の上だ。

俺は細く長い息を吐き出す。

「でもまあ、旅団クラスの団長ってんだから、出世ですね。おめでとうございます……………団長」

これ以前のアキラ・キサラギは一個連隊……………エミールア騎士団で

は三千人ほどで編成される一個連隊の隊長であつたから、旅団長に任命されたからには、その呼称も変わるということになる。

「すると……階級も上がりますね。とうとう准将ですか…将官クラス就任…俺も鼻が高いですよ」

その言葉に、俺の三步前を歩いていた団長が、眉間に深い縦皺を刻んで振り返った。

「ぐい、と俺の襟首を引き寄せる。

「二人きりのときは、ボクのことはアキラって呼べって言っただろう……！ 何が団長だ！ そんなもの……おまえはそんなに……！」
「って、まだそんなこと言うんですか？」

はあ、と溜め息を吐き出す。

団長……アキラは頭も切れるし、腕も立つ。生まれも一応は貴族の出身だ。前途有望な彼女だが、時折訳の分からない要求で俺を困らせる。

諭すように言う。

「あのですね、団長。それでなくとも、俺たちは団長と副長の間柄なんです。二人きりでいることが多いんですから、普段から注意しておかないと。そのつもりがなくても、こんなとこ風紀部の連中に見つかつたら、えらいことになりますよ？」

「風紀部…？ 今は、ボクとおまえの話をしているんだ！ 奴らは関係ないだろう！」

「ありますよ！ 団長は貴族だからいいですけど、平民出身の俺は、除隊どころか、最悪殺されるかもしれないんですから！」

「おまえ……ボクのいうことがきけないのか……！」

平民にそんなに呼び捨てにされたいのか…？　少し呆れてしまう。

『エミール騎士団』は、元の始まりはただの修道会で、その名の由来は創立者の修道女『エミール』だ。戦地での主な働きは医療活動だった。しかし、三年前に前団長であるカロツサ公爵が、後任を娘のヒルデガルドに譲り、以来その活動には軍事行動も含まれるようになった。

大幅な増員に伴い、俺のような傭兵上がりにも出世のチャンスができたわけだが、このエミール騎士団は元々の活動は医療活動が主であっただけに、その編成は女性が半数以上を占めている。

他国の騎士団と比較して、男女の構成比に著しく公平を欠くエミール騎士団の、現在の大きな懸念材料が男女の恋愛関係だ。

他国の騎士団には、馬鹿馬鹿しいと一笑に付されるこの懸念だが、急速に発展して来たエミール騎士団にとっては、大きな問題だ。

現在、俺の目の前で毛を逆立てて、怒りに震えるアキラ・キサラギなんかもそうだが、エミール騎士団の抱える上級将官の実に八割が女性だ。その内、未婚者が七割。

優秀な将官が結婚、妊娠を契機に長期の休暇、なんてことになったら、軍上層部は目も当てられんだろう。そこで新しく新設された部門『風紀部』の出番だ。

傭兵上がりや、他国の将官クラスを引き抜いて、男の人員を増やす一方で、男女の構成比にバランスが取れるまで、時間を稼ごうという腹なんだろう。『風紀部』は主に、騎士団内部の男女関係を取り締まる。

上級将官であるアキラとの間に変な噂でも流れれば、仮に、事実無根であったとしても平民出身の俺は、見せしめのために処刑されかねん。

それは、あまりぞつとしない想像だ。先程まで考えていたのも、アキラとの距離感についてだ。

周囲に人影のないことを確認し、アキラと視線を合わせる。

「アキラ、落ち着いてください」

一方のアキラは目元を赤くして憤慨している。何でそこまで追い詰められたか分からないが、過呼吸に近い様相で興奮している。

「これが落ち着けるか！ それになんだ、おまえの言葉遣いは！ 他人行儀な……！」

嫌がる俺に言葉遣いと礼儀作法を叩き込んだお方の言葉とは思えない。

「アキラ？ アキラ……？」

癇癢を起こした子供に母親がするように、背中を撫でてやる。

「うつ、ぐ……」

アキラは、ぐっと目を閉じ、うつすらと涙さえ浮かべながら、嵐が去るのを待つかのように俯いて黙り込んだ。

不思議な関係だ。我ながらそう思う。

アキラとは、上官と部下との関係だ。同じ部隊で同じ作戦をこなしたし、同じ釜のメシも食った。やばい作戦もあったし、一緒に死線を抜けたこともあった。だがそれ以外は何もない。なのに何故、こんな偏った関係になったのだろうか。

アキラの俺に対する執着……なぜ、こうなった？

肩で大きく息をするアキラに言う。

「アキラ、公私の区別のつかない貴女ではないでしょう?」
「……」

ついに流れた涙を、袖で拭いながら、アキラは上目使いに睨みつけて来た。

「おまえ…よくも……」
「はい」

困ったものだ。ここまで酷い癪癢も久しぶりだ。一年前、人事で別部隊に飛ばされそうになった時以来の荒れようだ。

「覚えてろよ…」
「はい」
「後で、ひどいからな…」
「はい」

取り敢えず、全ての言葉に肯定しておく。アキラの癪癢には、それが一番有効だ。

その後、小一時間に渡って、俺は罵倒され続けた。
唐変木、馬の骨、でくの坊、田舎者、神父の息子、傭兵上がり。
散々言われたが、まあ、概ね合ってる。その全てに肯定しておいた。
最後に大きく鼻を嚙り、ようやくアキラは落ち着いたようだ。

「忘れてたが……お前も出世したからな」
「はい…って、え? 俺もですか?」

アキラは少し得意そうに頷いた。

「まあ、このボクの副官が下士官じゃ、格好がつかないからな。ありがたく思え」

「そうですか…俺が、少佐に……」

複雑な気分だ。

通常、平民出の騎士がその地位につくことは、まず無い。あったとしても、引退間近の老騎士に対する捨て扶持といったところか。だが、俺はまだ二十代の前半だ。これは平民出の騎士としては異例の出世スピードだ。

今までだって、同僚のやつかみたいなのはあった。アキラ・キサラギのお気に入りということで、皆、沈黙していたが、少佐ともなるとそうもいかんだろう。

これが何かの火種にならなければいいが……。

「なんだ、レオ。不満なのか？」

俺の反応は、アキラには少し不服だったようだ。唇を尖らせる。

「いえ、そんなことは…ありがとうございます……」

退役。ふと、そんな言葉が脳裏を過る。

元々、俺は片田舎の神父の息子だ。その田舎者が、騎士に憧れてこのニードーサクソンまでやって来たのはいいものの、現実はそんなに甘くなく、その日暮らしの傭兵稼業に就くはめになった。時勢がよく、騎士に取り立てられはしたが……。

これが潮時かもしれない。切った張ったのやり取りにも嫌気が差していたところだ。

今、退役しても国から出る恩給で、俺と、後一人くらいは十分やって行けるだろう。

「……」
「やっぱり……爵位が得られないのが不満か。それは少し待ってくれないか……？」

退役か……。

もう少し熟慮するべきだろうが、これは結構名案かもしれない。
俺をやっかむ同僚たちも、退役してしまうと知れば、団長の温情と
いうことで納得するだろう。

「いや、別にお前を過小評価しているわけじゃないんだ。ただ、貴族の中には、元傭兵のお前に爵位を与えることに反対の者もいる。
やつらを黙らせるには、もっと功績が必要なんだ」
「……」

ぼちぼちで身辺を整理して行くか……。次の出征が終わったところが切り出し頃だな。

「……やっぱり腹を立てているんだな？ でも、ボクだって頑張ってるんだ。それは理解してほしい」
「……？」

いかん、また考え事をしていた。悪い癖だ。

「お前の言う通り、公私のけじめは確かに大事なことだ。けど、それとボクたち二人のことは、また別の問題だろう……？」
「はい」

やばい……なんの話だ？ 全然ついていけない。でもまあ……なんとかなるだろう。俺がアキラの話を聞かないのは、これが初めてじゃないし……。

アキラは笑みを浮かべると、俺の手を取った。

「わかってくれたんだな？」

「はい」

俺は一つ咳払いをする。これ以上、分けのわからん話に付き合わされてはかなわん。

「…それでは、新しい兵舎でも見に行きますか？」

「うん、そうだな！」

アキラは、につこり笑った。怒ったり、泣いたり、笑ったりと忙しいやつだ。

常に俺の三步前を歩くアキラ・キサラギだが、彼女には様々な逸話がある。

曰く、アキラ・キサラギは、ホビットの血を引いている。まあ、小柄だからな。確認のしようはないが、信憑性はある。

曰く、アキラ・キサラギは猫の獣人の血を引いている。噂では、尻尾が生えているとかいないとか。

多人種の住むこの大陸では、特に珍しい話ではない。

この逸話が事実であるとするならば、アキラ・キサラギはハイブリッドということになる。生物としては俺のような純粋種の人間などより、余程高みにいるということだ。

これらの逸話に関しては、信憑性はあるものの、確信はない。確信を持って言えるのは、アキラ・キサラギという名の由来は、今はもう海に没した東方の大陸のものである、ということだけだ。

アキラ・キサラギが東方の流れを引くというのは、疑いのような事実だ。それを証明する一つの証拠が、今、彼女が腰に差している『カタナ』だ。これは俺が愛用している『剣』などとは似て非なるものだ。恐ろしい切れ味と、美しい紋様。扱うには独特の技術が必要だ。

アキラはこの『カタナ』で身の丈が己の倍はあろうかという巨漢の首を、一刀で撥ねて見せたことがある。『剣』では出来ない芸当だ。

そのアキラだが、背筋を伸ばし、後ろに手を組んで少しお尻を振りながら歩く。スリムな体型に長い尻尾を持つ猫の獣人がよくやる歩き方だ。そんな彼女に付いたあだ名は、

『猫隊長』 或いは『猫大将』。

なぜか機嫌が良くなったようで、鼻歌混じりにずんずん先を歩いて行く。

「おい、レオ。置いて行くぞー！」

俺は慌てて、アキラの後を追った。

第2話 副長の怒り

この度、新設される第12旅団であるが、『旅団』クラスの部隊はこのエミリア騎士団では三個連隊を持つて編成される。

一個連隊が約一五〇〇～二〇〇〇人で編成されていることを考えると、第12旅団は最低でも四五〇〇人。多ければ六〇〇〇人の集団ということになりそうだ。

木造で古めかしい造りであった旧兵舎とは違い、新しく割り振られた兵舎は赤煉瓦拵えの二階建ての建物だった。

アキラはご満悦で、新兵舎の居住区を見て回った。無論、副長たる俺も後に続く。

「レオ、ボクの部屋は見晴らしのいい屋上にしようと思うんだが、どうだろうか?」

「何、馬鹿なことやってんですか。有事の際、屋上にいたら大変でしょうが。団長は離れに邸宅が用意されていますよ」

アキラの形の良い眉が、きゅっと寄った。これは機嫌を悪くする一歩手前だ。

「ちなみに……お前は、何処に寝泊まりするんだ?」

「そりゃ、この新兵舎ですよ」

副長だから個室だ。まあ、連隊の副長時代から個室は宛てがわれていたので、さしたる感動はない。

「…ボクは、どうなるんだ?」

アキラは低く言う。雲行きが怪しくなってきたようだ。ますます表情が険しくなってきた。

「はい、入り口に不寝番の衛兵が何人が付きます」

危ない。あと少しで、知るかと言いつづになった。

「別にボクは、そんなものは頼んでない」

「まあ、堅苦しいのは分かりますけどね。我慢して下さい。偉くなるってのは、そういうものなんですよ」

准将になるアキラは、連隊長時とは待遇が変わる。衛兵も付くし、専属のメイドなんかも付く。将官クラスの扱いは別格だ。今はぐずっているが、そのうち考えも変わるだろう。

「副長は、いつから団長と離れ離れになっても良くなったんだ…？」

「俺の」

この一人称も改めんといかな。俺がだらしなければ、恥をかくのは団長のアキラだ。それでも、一応は期待されて副長の地位に就いたと自負してる。いつまでも傭兵上がりでは通用しない。

「小官の部屋でしたら、新兵舎の一階です。有事の際は」

最後まで言うことは出来なかった。

アキラの拳が鳩尾にめり込んでいる。彼女は小柄だが、その拳は石より固い。そして、何よりも効く。家に伝わる特殊な体術らしい。『カラテ』とか言ったか。

「か、は」

肺から空気を絞り出し、苦痛に喘ぐ俺に、アキラは少し周囲の様子を確認しながら言う。

「なんなんだ、お前は。ボクの嫌がることばかりしやがって。二人きりだぞ？ わかつてるのか？」

…なんのことだ？ しかし、こいつは効く。頭三つは小柄なアキラに殴られて、膝を着く俺って……情けない。

俺の襟首を持ち上げるアキラから表情が消える。何か知らんが、彼女は本気だ。修正モードだ。兎に角、何か言い訳しないと、足腰立たなくなるまで叩きのめされてしまう。

「う、く」

駄目だ！ 喋れない！ 一撃でこれか……。息を吸うのも難しい。言葉の替わりに、だからと脂汗が吹き出してくる。

畜生、このチビめ！

「反抗的な目付きだな……。言いたいことがあるのか？ 言ってみろ？」

「ぜ、んぶ、あなたの、ため……」

「え？」

と、アキラは若干怯む。少しは聞く耳があったようだ。

「俺が、だらしないと……団長に、迷惑が……」

痛みに途切れがちな言葉をなんとか吐き出す。

「え？ え？ おまえが、ボクのために？」

困惑して視線の定まらないアキラに、俺は大きく頷きかける。

「あなたの努力を、俺 私は知って、います……。私の不始末で、あなたに……」

「もういい！ わかった、わかったから無理して喋るな！」

おろおろとしたアキラが俺に近づく。しかし アキラに殴られたのは、これで何度目だ？ 身体に染み込んだ恐怖は、そう簡単に隠し仰せるものではない。思わず、身が竦んでしまう。

はっとしたように、アキラは飛びのいた。

「くそっ、くそっ……」

唇を噛み締め、俺を打った拳を摩るアキラの表情には、ひたすら困惑の色が見て取れた。

「ボクは謝らないからな。おまえがいけないんだ。ボクは悪くない！ ボクは悪くない！」

「…はい」

なんとか返事を返すと、アキラはなぜか絶望したような表情になった。

近いうちに、絶対に辞めてやる。

俺は決意を固くするのだった。

第3話 猫のメイドさん

この日は、アキラに断って早めに自室に引き取る。

第12旅団の結成は決定されているものの、正式な辞令はまだだ。手続き上の問題もあるが、この間延びした時間は、大抵の場合、準備時間に充てられる。

俺は独り者なので、準備にさしたる手間は掛からないが、その分、副長としてやっておかねばならないことが多々ある。

アキラ・キサラギは優秀な軍人だが、困ったことに怠け癖がある。雑事は俺の担当だ。

新兵舎の間取りの暗記は勿論、有事の際の連絡手段も考慮せねばならない。連絡手段に関しては、連隊時代のを強化、見直すとして、内乱や暴動などの際の行動手順などもマニュアルとして落としで行かねばならない。これも連隊時代に作成したものがあるが、規模が替わる以上、大幅な見直しを要求されることになる。

とかく、アキラ・キサラギの副長は忙しい。

通常、一個連隊は一五〇〇〜二〇〇〇人の集団から成るが、これを率いるのは中佐が大佐の階級を持つ上級士官である。

『旅団』クラスの編成は最低でも二個連隊。つまり、アキラ・キサラギは最低でも一名の上級士官を新たに幕僚に加えることになる。先日、解体された一個師団の連隊長二名が再有力候補だろう。目星は付けてあるので、既に自然な成り行きを装って、二名には接触してある。

傭兵稼業の長かった俺は、こういう根回しが結構得意だ。まあ、それだけ苦労しているということだ。

接触した連隊長二名の資料を纏め、アキラに提出、面談の予定を組まなければならない。これは、おかしいことだが俺が勝手にやっていることだ。他の部隊では、こんな面倒なことはいない。軍上層

部の人事に任せきりなのが通例だ。結成の式典がお互いの初顔合わせ、などということも珍しくない。

面倒を勝手に抱え込む俺だが、この行為には計り知れない利点がある。

前以て面識を持ち、あわよくば友誼を持つことが出来れば、後々取り込み易くなる。それは戦闘の際の連携にも密接に関係してくる。仮に、お互い初対面の印象が悪かったとしても、時間を置けば理解を得られるかも知れない。最悪、この段階で物別れということになってしまえば、人事にそれとなく働きかけ、多少なりとも異動に考慮の時間を与えることが出来る。

アキラ・キサラギと同様に、俺も負けなくらい面倒臭がりだ。トラブルは少ない方がいい。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー。

イザベラ・フォン・バックハウス。

フォンは、このニードーサクソン古来の貴族であることの証し。今のところ、この二名が、新しく第12旅団に配属されそうな再有力候補だ。

困ったことに、二名とも未婚の女性。しかも門閥貴族の子女だ。二人とも負けず劣らずプライドは高いが、まあ、その辺りは如才なく接したつもりだ。手応えは悪くない。

後は、俺の上官の猫大将の気分次第、といったところか。屈服させるか、或いは友誼を結び、知己を得るか。

「あの…大尉、そろそろおやすみになられた方が……」

背後からの声に振り返ると、そこにはメイドのエルが気遣わしげな視線を向けている。

エルは猫の獣人の女性だ。

四年前、未だ傭兵だったころ、軍から降りて来た作戦で、一つの村を焼き払ったことがある。

百人ほどの小さい村で、疫病と飢饉でもうどうしようもなかった。今、思い出しても軍の指示は妥当だったと思うし、判断は適切だったと思う。

村を焼き払うことも、その汚れ仕事を傭兵に押し付けられることも。俺が軍の高官なら、俺だってそうする。だから、恨みはない。それとは別として、俺にもささやかながら良心というものがある。

エルは、俺が焼き払った村の住人の生き残りだ。

「お願いです、助けてください……」

と、命乞いする彼女をどうしても見捨てることができなかった。

散々、無茶して、金も人脈も使えるものは全て使って、エル一人だけをなんとか助けられることができた。

それから四年。安月給にも拘わらず、エルはよくしてくれてる。

「ああ、もうこんな時間か……」

暗くなった窓の外を見やり、首を鳴らす。

「そうだ、エル。俺、今度出世して少佐になったんだ」

これでエルの月給も上げてやれる。何せ、傭兵時代からの付き合いだ。貧乏暮らして無給の時だってあった。彼女には報いてやりたい。

「そうですか……」

とエルは、素っ気ない。

無理もない。俺はエルの生まれ故郷を焼いた男だ。恨んで当然なのだ。命を助けたからといって、それを恩に着せるつもりもない。……偽善だな。素直にそう思う。罪のない民間人を虐殺しておいて、エル一人に報いたからといって、その罪が許されようわけがない。

エルは……いつ、俺を殺しにくるのだろう。切った張ったが生業のこの稼業だ。いつ死んだっておかしくない。どうせいつか死ぬのなら、俺は、エルに殺されてやりたい。

それすらも傲慢か……。

それでも神父の息子だ。神の存在を信じてる。

俺の生きざまが罰せられるべきならば、いずれ報いがあるだろう。

「それともう一つ」

「……」

エルは面倒臭そうに振り返る。

「今度の出征が終わったなら、退役しようと思う」

「はい……それが何か？」

そう来るか。スルーですか。少し気が抜けてしまふ。エルは俺のことなど、どうでもいいのだろう。

「いや、だから……そうになると、もう兵舎に居られない。だから、その……エルはどうするかと思って……」

いかん、どうも齒切れが悪い。どう言えはいいかわからん。

「どうしましょう」

エルは興味なさそうに首を傾げる。

「まあ、確定したわけでもないから、今は具体的なことは言えないんだが……その、考えておいてほしいんだ」

「はあ……考える、ですか」

「俺としては、エルに付いて来てほしいと思ってる。もちろん、無理には言わないが……俺は、その、切った張ったしか能が無いし……エルの助けが必要で……」

「……」

ランプの薄暗い闇の中でエルと目が合う。

猫の獣人は、体の正面部位には毛が生えていない。顔、胸、腹、手のひら。それ以外の部位に薄い毛皮。頭に尖った耳がある以外は、人間とさして変わりが無い。

そのエルも今年で十五歳。獣人の成長は人間より早く、一般的にその成人年齢は十二歳とされているから、もう十分に大人だ。だからだろうか。少し緊張してしまうのは。

ええい、本音を言ってしまうえ！

「エル、お前が心配だ。黙って俺について来い」
「……」

その時、エルの瞳がぴかりと光ったような気がした。

「はい、それを望まれるのであれば……お供します」

正解。気を使うのは性に合わない。気分が良かった。

「よろしい！ 今日の下がって休んでくれ」

「はい、それでは」

短く言ってエルは引き下がる。去り際、振り返り、

「…それでは、どこまでも…」

と呟いた。

第4話 わがまま

正式な辞令が下った。

これでアキラ・キサラギの率いる第七連隊は、これに二個連隊を加えた計三個連隊 第12旅団として機能して行くことになる。

「なあ、レオ。ボクはどうしたらいいんだ？」

これが上官の言葉とは思えない。それを決めるのはあんだだろう、と言ってやりたい。

アキラ・キサラギは優秀な軍人ではあるが、極めて怠け癖の強い性格をしている。

「…とりあえず、馬鹿共を集めますんで、隊長、じゃない。団長は、後ろで睨みを利かせていて下さい」

第七連隊は傭兵上がりが多く、実戦経験も豊富で結束も固い。その反面、血の気が多く荒くれ者も多い。命知らずのお調子者が多いのが特徴で、軍議は脱線することがしばしばある。そのため、団長のアキラが睨みを利かせ、俺が仕切る。

エミールア騎士団では、一個連隊は三個大隊ほどで組織されている。これらを指揮するのは、基本的には少佐クラスの士官である。

第七連隊の場合、大隊指揮官として三名の少佐。それらは各々副官として中尉クラスの下士官がついている。

俺が言った『馬鹿共』というのは、この第七連隊の中核を成す大隊指揮官、及びその副官を含めた計六名のことではなく、それ以外の平騎士たちのことだ。

「そんなことより、団長。この第七連隊を任せる士官を決めてくれましたか？」

アキラは、むすつとして腕組みした。

「第七連隊の隊長はボクだ。だれにも任せるつもりはない」
「だから……」

俺は頭を抱えた。

「……気持ちは分かりますけど、団長はこれから三個連隊の指揮を執るんです。一個連隊にばかり手を取られるわけにはいかんでしょう。……まあ、直属の第七連隊が可愛いのはわかりますけどね」
「……じゃあ、レオ。お前に第七連隊を任せる」

渋々言われても嬉しくない。問題はそれだけじゃない。

「何言ってるんですか。俺は少佐ですよ？ 階級的には大隊クラスの指揮官が妥当です。まあ、どうしてもというなら出来ないこともないですけど……」

「じゃあ、どうしてもだ」

「わかりました。それじゃあ、俺に代わる副長を任命して下さい」
「なっ！」

とアキラは仰天する。

「ふざけるなよ、そんなの兼任すれば済む話じゃないか！」
「だから……」

俺はやっぱ頭を抱える。この話し合いは既に三度目だ。嫌気が

さしてきた。

「そんなことできるわけがないでしょう。だから、信用出来る大隊長の中から、一人選べって言うてるんです。大隊長の資料は持つてますよね？」

「……」

アキラは、つーんとそっぽを向いた。

「まあ、いいでしょう」

アキラ・キサラギは馬鹿ではない。嫌がるのなら、それなりの理由があるのだろう。

「アスペルマイヤー、バックハウス両大佐との面談のこと考えてくれましたか？」

「……」

アキラの表情が険しくなる。

この様子だと、報告書はちゃんと目を通したようだ。とても嫌そうな顔をしている。

つまり、アスペルマイヤー、バックハウスの両大佐はお気に召さないというわけか。それで、手飼いの第七連隊は側に置いておきたいというわけだ。

まあそうだろうな。

アスペルマイヤー、バックハウス両名とも、家名だけなら団長を凌ぐ家柄の出身だ。扱い辛いと感じたのだろう。しかし……アキラの度量なら、どうにかするのではないか、と思ったのは買いかぶり

過ぎだつたらうか。

「おまえ…二人とは知り合いなんだろう？」

「ええ、そうですか」

「特にアスペルマイヤーとは懇意にしているらしいじゃないか」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー。

傭兵時代、彼女の指揮する部隊に一時所属していたことがある。俺には、ある能力があつて彼女の部隊では非常に重宝されていた。一年前、人事部に働きかけ、俺を旗下に加えようとしたのも彼女だ。アキラの猛烈な反対と妨害で断念したが、先日会ったときは、再会を喜んでいた。

「なんです？ 一年前のこと、まだ根に持つてゐるんですか？」

「当然だ！ このボクから引き抜きだぞ？ よりによって……くそっ！ 今、思い出しても腹が立つ！」

こりや、駄目だ。アスペルマイヤーはペケ、と。

「それでは、バックハウス大佐はどうです？」

「ふざけるな！ あいつはエルフじゃないか！」

いよいよ頭に血が昇つたのだらう。アキラは怒鳴り散らした。

種の純血に拘りを持つエルフを嫌う人間は多い。アキラも多分に漏れず、エルフは嫌いなようだ。

はいはい、バックハウスもペケ、と。

「レオ！ エルフとはどういう関係なんだ！？ 事と次第によつては、おまえでもただじゃおかないぞ！」

「アスペルマイヤー大佐とバックハウス大佐は、幼なじみなんです

よ。それで知己を得た。それだけです」

「本当だろうな！ アスペルマイヤーは！？ どんな関係だ！」

すごい見幕だ。少し、引いておこう。

「アスペルマイヤー大佐ですか？ 会えば挨拶くらいはしますが、それだけですな。一緒に食事をしたり、話し込んだりするような仲ではないです」

顔を真っ赤にしたアキラは、苛々と執務室の中を歩き回った。

「会わないからな！」

「はい」

と言ってはみたものの。

嫌いだから、という理由で二人の率いる二個連隊の併合を断ることはできない。

やれやれ、アキラと二人の出会い、第12旅団の結成式典の時に
なりそうだ。

第5話 第七連隊

正式な辞令が下り、第12旅団は一週間の準備期間を経て発足することになる。それに辺り、俺は『馬鹿共』たちに色々と指示する必要があつた。

木造の兵舎を引き払い、新造の煉瓦造りの兵舎に移動する指示を出さなければいけない。我ながら、心配症の苦勞性であるが、こういった瑣末な指示を怠れば、予期せぬ事態に見舞われることがある。馬鹿共……第七連隊の平騎士たちであるが、全員が全員騎乗の騎士ではない。歩兵、騎兵、工兵、砲兵、兵站など、兵科は別れる。馬鹿共を旧兵舎に終結させ、移動の手順、その際の交通路などを指示していく。反対意見や懸念事項はこの時、一緒に処理する。俺の手に余る判断が迫られる時は、後背で睨みを利かせるアキラの出番だ。

大きく息を吸い、第七連隊1723名全員に行き渡るよう、声を張り上げる。

「いいか、馬鹿共！ 他の連隊と揉めるんじゃないぞ！」

他の連隊とは、アスペルマイヤー、バックハウスの両連隊のことだ。詰まらないことだが、きちんと言及しておかないと、傭兵上がりの多いこの第七連隊の連中は揉め事を起こす可能性がある。

「わかったか！ お前らの新しいヤサは、赤い煉瓦造りの第一から第三兵舎だ！」

第七連隊の連中は傭兵上がりが多く、そのため礼儀作法にはうるさくない。身体に馴染む古巢の匂いに、俺も少し気が緩んでしまう。

でかい声を張り上げながら連中を見回す。

メモを取る者もいれば、住み慣れた兵舎から離れることを愚痴る者もいる。後ろでは、なぜかアキラもメモを取っていた。

移動の手段くらい、あんたの好きにすればいいでしょう……俺は少し呆れてしまう。

「おい、神父の息子！ 階級章が変わってるが、出世したのか！」

馬鹿共が俺のマントに付いた新しい階級章を見てざわめき立つ。

「そうだ！ これから俺のことは、さん付けで呼べよな！」

「馬鹿いつてんじゃねえ！ 偉いのは、おめえじゃなくて階級の方じゃねえか！」

そうだそうだと騒ぎ出し、周囲からげたげたと冷やかしの笑いが上がる。

俺は一つ頷いて、大声を張り上げる。

「そういうことだ！ これまでと何も変わらん！ バッジの色が変わっただけだ！」

「やっぱりな！ バッジの色は変わっても、オツムの具合は変わりやしねえ！」

どつと吹き出した連中に混じり、背後でアキラが吹き出す声も聞こえる。

馬鹿で気さくで底抜けに明るいのが、この第七連隊の特徴だ。

出世したからといって、俺とこいつらの関係が変わるわけではない。このおかしなやり取りは、馬鹿みただがお互いのために必要なことだ。

大きく一つ手を打って、場を締める。

「ようし、それでは第12旅団結成を前に、団長から一言ある」

突如、話を振られたアキラは、きょとんとして自分を指差している。その表情は意外そうだ。

「ボク？ いいよ！ いい！ ガラじゃない！」

それは俺だつて一緒だ。むずがるアキラに厳しい視線で言葉を促す。

「……隊長もいよいよ、准将か。猫隊長が猫將軍に出世したなあ、おい」

「こりゃあ、めでたい！」

馬鹿共が、やんややんやと騒ぎ出す。

アキラはそれを見ながら、まんざらでもなさそうに頬を緩ませている。馬鹿は馬鹿なりに、彼女のことを慕っている。それなりに可愛いのだろう。

アキラは立ち上がり、えっへと一つ咳払いをした。その様子に馬鹿共も口を噤み、静かに言葉を待つ。俺の時とは大違いだ。

「えー……みんな、張り切るのはいいけど、怪我はしないように……」

なぜか、アキラを中心にしんみりとした空気が流れる。中には、涙さえ浮かべるヤツもいる。分けがわからん。今の言葉に感動の要素があつたのだろうか。

だが、締めるにはいい空気だ。

「何か質問はないか！ なければ解散する！」

その声に、ぱつと一つの手が挙がる。馬鹿共の一人だ。にやついている。こいつらは、俺を見れば困らそうと躍起になる。親しむのはいいが、時折、腹が立つ。

「他の連隊と揉めたときはどうすりゃいいんですか？」

「知らん！ ケツでも差し出せ！ 以上で解散する！」

いかん、これではまるで傭兵そのものだ。混ぜ返されて、ついむきになった。

馬鹿共は俺の反応に満足いったようだ。笑い合いながら、兵舎に引き上げて行く。

……こりゃ、またアキラに絞られるな。

「やれやれ……」

と顔を拭う俺に厳しい視線を送るやつらがいる。

第七連隊の中核を成す大隊指揮官三名だ。

「ベッカー、相変わらず下品だな」

階級はいずれも俺と同じ少佐だが、家柄が違う。三名とも貴族の家柄で、士官学校を卒業している。粗野で田舎者の俺とは格が違う連中だ。

「少佐になったそうだな？」

「はい……」

この三人のような中流階級の貴族たちは、平民に対して容赦がな

い。逆に門閥貴族と呼ばれる上流貴族の連中は、平民に対しては温厚で寛容だ。相手にしないとも言うが。

この三人は、第七連隊が旅団クラスへの昇格に伴う際の昇級に縁がなかった。この絡みもやつかみの類いだが、平民の俺には受け答え一つで無礼討ちの対象にもなりかねない。

左から順に、アーベル、エドガー、オスカーだ。

「貴様のような下郎に階級が並ばれたかと思えば、ぞっとする」

リーダー格のエドガーが進み出て、俺のトーガで手を拭う。

「猫の腰巾着の分際で、少佐とは……」

「団長は関係ない」

しまった！ つい口を衝いたその失言に唇を噛む。

「ほう……ベッカー、また睥られたいようだな……？」

「く……」

またか。この前はアキラ。今日はこの三人か……。

これは……エルに怒られそうだな。

第6話 猫がやむとき

人気を避けた兵舎の裏手で、俺は結構な臍を受けた。

「いてて……」

奥歯が少しぐらつく。エドガーめ、相変わらず容赦のない。俺がアキラのお気に入りでなかったら、とうに殺されていただろう。

……この述懐もおかしな話だ。よくよく考えれば、俺はアキラのお気に入りだからこそ、殴られたとも考えられる。しかも、そのアキラを庇うような言動が原因で。

くそつ、マントが煤塗れになってしまった。

俺の荷物は、エルに命じて既に新兵舎に運んである。平民だろうが、傭兵上がりだろうが、俺は副長だ。何より先ず、皆に手本を示さねばならない。

「副長、副長！」

第七連隊 第12旅団の騎士の一人に呼び止められる。

「なんだ？」

「キサラギ団長が探してましたよ……って、また喧嘩ですか？」

一方的に殴られることを喧嘩というのなら、そうだろう。頷いておく。

「副長も、もう少佐なんですから、謹んでくださいよ」

「わかつてるよ」

「副長は、おれたち平民の誇りです。これからも頑張ってください」

その言葉に、俺は項垂れがちだった顔を上げる。

若い騎士だ。まだ、二十にもならんだろう。

「ああ、頑張る。お前も頑張れよ。キサラギ団長は、厳しいが信賞必罰を以て成るお方だ。努力は必ず報われる」

「はい！ それでは失礼します！」

誇り……か。間違っても退役を考えているとは言えんな。走り去る若い騎士の背中を見送り、俺は小さく息を吐く。
アキラ・キサラギ……今は会いたくない……貴族は、すぐ俺を殴る。

いかんいかん。落ち込む暇など無い。
兵舎に向けて歩きだす。照り付ける夕陽が、少し目に滲みた。
道すがら、馬鹿共に声を掛けられる。

「よお、レオ……って、おまえ、どうしたその怪我。猫の大将は、顔は殴らんだろう」

「転んだだけだ。少々、間抜けな転び方をしてな」

につ、と笑いかけるが、馬鹿共は笑わなかった。

傭兵上がりが士官として、やって行くことの辛さや難しさは、同じ傭兵上がりにしか分からない。そして貴族の士官連中と、傭兵上がりの俺との折り合いのまずさは、第七連隊の皆知るところだ。

「大隊長の仕業か……！」

「言っな。俺の問題だ」

傭兵の横の繋がりは強い。とくに元第七連隊の傭兵上がりの連中は、ほとんどが俺と剣を並べて戦ったことのあるやつばかりだ。死線を共に抜け、苦勞を分かち合った絆は強い。普段、馬鹿共と連中を罵る俺だが、こんなときは、胸が熱くなってしまう。

馬鹿共は何も言わない。ただ、俺の肩を叩く。『俺の問題』と言いつつ俺の意志を尊重してくれる。

「……」

空を見る。こんなことから、いつまでたっても『神父の息子』と馬鹿にされる。

「……」

ただ空を見る。馬鹿共 仲間たちの視線が痛い。

「レオ！ レオ！ ここにいたのか！ ボクが呼んだら」

この声はアキラだ。それでも俺は空を見る。やけに滲む夕陽だ。

「……なんだ、レオ。やけにしけた顔をしているな……」

アキラの声が低くなった。

「…何があった？」

「いえ、なにも。それよりどうかしました？」

なるべく平然として答える。そんな俺の視線を躲すように、アキラは、ついつと周囲に視線を走らせる。

「……！」

仲間たちは、ぎょつとして目を逸らすと、慌ててその場を立ち去って行った。俺からは、うつむき加減のアキラの表情を伺うことはできない。どんな顔をしているのだろう。

「レオ……」

アキラは呟いて、顎をしゃくる。ついて来いの合図だ。そのまま、振り返る事なく、早足で歩いて行く。

執務室の方向だ。すれ違う騎士たちは、アキラを見て固まるか逃げ出すかのどちらかだ。

荷物が運び出され、机一つになった執務室でアキラと向かいあった。

「う……」

思わず呻く。アキラは全身に怒りを漲らせ、悪鬼のような形相だった。

「だれだ……」

「はい？」

間抜けな返事だ。アキラの様子は……やばい……いつもの比じゃない……。

「だれが、おまえを、殴った……」

途切れ途切れ呟くアキラは、全身から湧き上がる怒りの炎を必死で押さえ付けているかのようだ。両肩が小刻みに震えている。

冷たい汗が背筋に伝う。

「いえ、これは……その、少し転んでしまつて……」

何が起こつてる？ 何故、アキラはここまで激怒する？

「レオ、答えろ、ボクは、そろそろ、限界だ……！」

アキラが顔を上げる。髪を逆立て、剥き出した歯には四本の牙が見て取れる。……エルにも同じ牙があつた。あの逸話は事実だったか……。

アキラが一步踏み出した。俺は思わず身を堅くする。

「うつうつうつ！ うあああああ！」

突然、アキラが叫び出した。刀を抜くや否や、樫の木の堅い机を一刀両断に叩き切る。

「なんなんだなんなんだなんなんだなんなんだなんなんだ、おまえは！」

もう三年もアキラに仕えたが、こんなに取り乱した様子は見たことがない。この様子を一言で現すとしたら、それは 狂気。

「どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてボクを恐れる！ どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてボクを拒絶するんだ！」

全身から冷たい汗が吹き出す。吹きかけられた狂気に身が竦む。

「答える！ レオンハルト・ベツカー！」

答える？ 何を？ 駄目だ。目が回る。どうしていいか分からない。

「なぜ答えない！」

アキラが全身で狂気の叫びを上げれば上げるほど、どうしたらいいかわからなくなる。

だが、一つだけ分かる。アキラ・キサラギが俺に向ける感情は、
狂気。

そこで、アキラは、はっとしたように手を打った。

「そうか！ ボクがおまえを殴るからだな？」

アキラは笑む。その移り変わりの早さに恐怖を覚える。

「そうなんだろう？ ボクがおまえを殴るから、そうなんだろう？」

「は、はい……」

頷くしかない。俺はいつだってそうして来たんだから。

「そうかそうか。わかった。ボクはもう、おまえを殴らない。誓う。
これでいいか？」

「は、はははい」

駄目だ…びびっちゃまって……。声が、震える。

打って変わって、アキラは喜色満面の笑顔だ。答えを見つけて、
すっきりしたと言わんばかりだ。

「どうした？ まだ動きが固いぞ？ ははあ、信じられないんだな？ わかった！ ボクの指をやるう！」

言って、アキラはナイフを抜き出すと、左の親指に宛てがう。

「…違うな。約束といえば、小指だよな！」

喜々と言うアキラ。鼻歌混じりに、ナイフを両手で弄ぶ。

「うわあ！ や、止めてください！ わかりました！ わかりましたから！」

俺はもう、泣きそうだ。アキラが怖すぎる。アキラが壊れてしまった。どうしたら直るんだろう。とりあえず

抱き着くようにして、アキラからナイフを取り上げた。

「……………」

どつと、汗が吹き出す。マントまで汗で、びっしょりだ。

「んん…」

小さなアキラが、すっぱりと俺の胸に収まっている。そんなこととは関係なく、心臓の鼓動が煩い。とりあえず、アキラから刃物を取り上げたことで、ほっとしてしまったのだ。だが、身体はこの異常な緊張を処理できずにいる。どつ、どつ、と鼓動を鳴らす。

もたれ掛かるアキラの背に手を回しながら、細く長い息を吐き出す。

幾度か深呼吸を繰り返す間、アキラはなぜか大人しくしていられた。

「アキラ、自分を傷つけてはいけません」
「……」

よし、落ち着いてきた。声も震えない。

「それだけはしないと約束してください」
「……」

アキラは胸の中、ためらいがちにはあつたものの、頷いた。
よかった……アキラも落ち着いてくれたんだろうか。
そうだよ。アキラが壊れるなんてない。あれは、ちょっと興奮しただけだ。

「でも、約束には血が必要だよね」

嬉しそうにほほ笑むアキラは……壊れたままだった。

第7話 それでも夜は終わらない

辺りが暗くなり、星が瞬くようになったころ、アキラを新しい邸宅まで送り届けた。

その間、アキラはずっと俺と手を繋いだままだった。

「ねえ、キミはどこで血を手に入れたらいいと思う？」

上機嫌で言うアキラは、猫なで声だ。俺に対する呼びかけも、いつものように乱暴なものではない。そして、かなり危うい発言を繰り返す。血に非常な拘りがあるようで、邸宅に着くまでの間、頻りにそのことを繰り返した。

「アキラ、血はいりませんか……！」

どうしよう。どうやったら、アキラは直るんだろう。膝を折り、子供にするように目を合わせて言うが、効果の程は甚だ疑問だ。頭を撫でたり、背中を摩ったりして様子を見る。風紀部に見られれば、肅正の対象になり兼ねんが、知ったことではない。

「ああ、アキラ、アキラ……どうしたら……」

駄目だ。機嫌がよくなるだけで、危うい瞳の色に変化はない。とつともなく不吉な予感がする。このまま、放置すれば、アキラはとんでもないことをやらかしそうだ。

邸宅が見えて来て、アキラは不意に、手を放した。

「ここまででいいよ」

門の前にいる衛兵の目を避けたのだろう。その辺りは冷静なよう
だ。

「ボク、変わるから。だからキミも、もっとボクを大事にしてほし
い」

照れ臭そうに言い残し、一目散に走りだす。

変わらんでいい。全身でそう叫びたい。お願いだから、元のアキ
ラ・キサラギに戻ってくれ。神に祈ってもかまわない。

その後、どこをどう歩いたかわからない。

気づくと、兵舎の前にいた。割り振られた俺の部屋の前で、エル
が明かりも持たずに立ち尽くしている。

「ああ…エル、ただいま。少し、心配させてしまったかな」

疲労しきった体に鞭打って、なんとかそれだけ吐き出す。

「いえ、そんなことは…」

エルはいつものように無表情だ。それに安心する俺は、余程疲れ
たのだろう。

「ひどい顔色です」

猫の獣人は夜目が利く。星明かりだけで、俺の疲労を看取ったよ
うだ。

「ああ、今日は色々、大変だったんだ。だからもう」

「お風呂にしましょう」

もう寝る、と言おうとした俺を遮り、エルは、言った。

「変な匂いがします」

エルは鼻をすんすんと鳴らした。犬ほどでないが、猫の獣人もそれなりに鼻が利く。

「そうか…そうかもしれないな。今日は、汗をかいたから……」

旅団の副長として、身なりにも気を配らなければならない。我ながら、難儀なことだ。

アスペルマイヤーにバックハウスか……。

アキラはあんなだから、話にならんだろう。やれるだけのことはやっておかないと。

両大佐と面識を深めなければ……

エルがぼそつと呟いた。

「アキラ・キサラギの匂い……」

はて、二人に面識があつたかな。疲労で惚ける頭で、そんなことを考えた。

副長である俺に振られた部屋は、余り広くはない。昇進して稼ぎも増えたのだから、小さい屋敷の一軒でも借りていいのだが、それ

はエルに反対された。

猫の獣人は無駄に広い空間を嫌う性質がある。貧乏暮らしのときは、その性質に助けられたが、いざ貧乏から脱却してみるとそれはそれで困ったものだ。

エルもそろそろ年頃だ。俺のような独身の騎士と二人暮らしでは、どのような噂が立つかわかったものではない。

疲労にはいいだろう。ということで、エルの入れたぬるい風呂の中で、色々を考える。

金は余ってる……そうだ、エルを学校にやったらどうだろう。彼女は、頭も悪くない。読み書き計算不自由ない。同年代の友人を作る機会を与えてやりたい。

これはなかなか、名案だ。

学校の寮にでも入れてしまえば悪い噂が立つこともなかるうし、将来、エルがどのように成長するかという楽しみもできる。

パタパタと廊下を走る音が聞こえる。

「レオさま、キサラギ准将が来られております……」

浴室の扉越しに、エルが小さく呟く。

アキラが？　どきん、と心臓が跳ねる。嫌な予感しかしない。

バスローブ一枚の格好で、あわてて居間に駆けつける。狭い部屋なので、すぐだ。

「やあ、レオ」

燭台のオレンジ色の明かりの中で、アキラがソファに深く腰掛けて、何故か誇らしそうに手を上げる。昼間ならコバルトブルーに光る瞳が、今は暗く淀んで見えた。

「団長、今、帰ったばかり」

そこまで言って、俺は絶句した。

アキラの纏う騎士の衣装。白いマントにもトーガにも、所々、赤い斑点がある。

返り血だ。

ざあーっ、と血の気が引く音が聞こえた。世界が足元から崩れて行くような気がした。

「どうぞ」

と、エルが呑気に茶など振る舞っている。

「だ、んちょう、何して来たん、ですか……？」

口からはカタコトの言葉があふれ出す。

「それだよ」

アキラは微笑んで、パチリと指を鳴らす。よく見ると、その頬にも返り血が浮かんでいる。

「キミにお土産を持って来たんだ。外の馬車に入ってるよ」
「み、やげ？」

呼吸が荒れる。今度は、何が起こったのだろう。
ふらつく腰をエルに支えられ、表に飛び出す。
馬車の中から、今にも消え入りそうな呻き声が聞こえる。
幌を捲ると、そこには……。

第8話 奥の手

オスカーとアーベルが、ガタガタと歯を鳴らしながら、膝を抱えている。

よかった。生きてる。

オスカーとアーベルは、一瞬視線をさ迷わせ、それから俺を見つめた、

「べ、ベツカーか……？」

「ああ」

二人に、いつものような居丈高な様子はない。おびえきっている。
「た、頼む！ エドガーを助けてくれ！ きつと、おまえは俺たちのことなんて、嫌いだろうけど、それでもどうか……！」

オスカーが馬車の荷台の中で両手を付く。

「頼む、ベツカー。このとおりだ。おまえ、『治癒魔法』が使えるんだろ？ 頼むよ……エドガーを、命だけは……」

確かに俺は治癒魔法が使える。

だが、それは傭兵仲間でもごく一部しか知らないことで、なるべくなら使用を控えている能力だ。喋ったのはだれだ？ 僅かな苛立ちが込み上げる。

「……」

視線を落とす。

自らが作ったであろう血溜まりに、後ろ手に縛られたエドガーが転がっていた。

視界がクリアになり、鼓動が落ち着きを取り戻す。

俺は戦争屋だ。騎士なんぞとのたまっているが、所詮人殺しだ。

これより酷い光景は山ほど見た。血を見て落ち着くとは、我ながら呪われた性分だ。

「…おい、エドガー」

「……」

返事はない。浅く早い呼吸。多量の出血。意識の喪失。

エミール騎士団の創立者『エミール』は修道女である。エミール騎士団の主な活動が医療活動であったことからしても、このニードーサクソンでは『治癒魔法』自体は特に珍しいものではない。

『治癒魔法』は神官の秘術である。『騎士』である俺がその秘術を使うことは、誰にも知られたくない。『奥の手』は誰にも知られたくない。

「……」

もう一度エドガーに視線を戻す。

首を一突きだ。アキラらしい無駄のないやり口だ。致命傷だが、傷自体は大きくない。『治癒』は可能だ。

「わかった。エドガーを助けよう」

「ほ、本当か？」

ほつと胸を撫で下ろすオスカーとアーベル。

……現在のエドガーは、死んでいないだけだ。傷を治したとしても、その状態は変わらない。出血が多すぎる。今は感謝するオスカーとアーベルだが、二、三日もすれば呪詛の言葉を口にするだろう。神官の秘術であるこの『治癒魔法』であるが、この能力は、決して『奇跡』などではない。失った血液は戻せないし、死者の蘇生は不可能だ。

無駄と知りつつ、それでも治癒を行うのは、戦場以外では、アキラに殺しをさせたくないというただ一点に過ぎない。

「エル……？」

背後にいたはずのエルがいない。アキラもだ。

アキラを遠ざけたのはエルだろうか。それなら都合だ。俺が『治癒魔法』を使えることは、アキラには絶対に知られたくない。

最後に、

「オスカー、アーベル、ここで見たことは他言無用だ」

二人が頷くのを確認し、袖を捲る。

『治癒』の守護者『アスクラピア』の象徴である蛇の紋様がとぐろを巻くようにして両腕に浮かび上がる。エドガーに触れる。

そして 俺の意識があつたのはここまでだ。

俺は、あまり強くない。剣の腕前でいえば、第七連隊の中では、中の上というところか。それもおまけしてのことだ。へたすりゃ、中の中、並もいいところかも知れない。その俺が門閥貴族であるアスペルマイヤーの知己を得たのも、傭兵上がりの連中から信頼されているのも、治癒魔法という『奥の手』があつたからに過ぎない。燭台の薄暗い明かりの中で、エルとアキラが談笑しているのが見える。足元には青ざめた表情のエドガーが転がっていて、その奥に拘束されたアーベルとオスカーの姿がある。

世界が回る。視界は薄い粘膜に覆われたかのように霞んでいて

これはマジックドランカー（魔法酔い）の症状だ。

『奥の手』を使うのは一年ぶりだ。こんなに鈍ってしまったのか。そう思わずにいられない。

意識に、また、夜の帳が落ちる

粘つく水の中から、身体を起こすように、ゆっくりと覚醒していく。マジックドラランカーから回復する際に訪れる症状の一つだ。治療魔法は便利だが、それなりに代償も大きい。

意識が微睡みながら回復する。

早朝の青い光りに霞む世界の中、エルが、うつとりとした表情で紫の紋が浮いたナイフの刀身を見つめている。

「……エル、それは……？」

エルは息を吐き、ナイフの刀身をゆっくりと鞘に収めた。

「アキラさまに頂きました。ククイチモンジという刀の刃から造った『短刀』というものらしいです」

「ククイチモンジ……」

「はい。なんでも、愛に狂った女の情念が染み付いているとか……」
笑い飛ばそうとしたが、真剣に言うエルの様子に、思わず息を飲む。

「アキラ 団長とは顔見知りか？」

エルは否定の方向に首を振った。

「いえ、昨夜が初対面でしたが……あのようなお方なら、もっと早めにお会いしたかったです」

エルが自分の要望や願望を口にするのはとても珍しいことだ。

……なんだろう。この粘つくような不安は。

アキラとエル。とてもよくない組み合わせのような気がする。

「エドガーたちは？」

「軍規に照らして処罰されるようで、昨夜のうちに連行されて行きました」

「処罰？」

訳が分からない。凶行に及んだのはアキラで、奴らではないはずだ。

「上官に対する不敬と、副長の少佐に対する暴行で、罷免させるのに十分な罪状だそうです」

「……」

確かにそれは事実だが、なんだか詭弁のようにも聞こえる。

……大隊長三人を更迭するのはいい。だが、代わりに誰を据えるつもりだ？

行かなければ。俺は副長だ。アキラを支える義務がある。

「お待ちを」

身を起こそうとした俺を、エルが押し止める。

「出仕は午後からで構わないとアキラさまはおっしゃっておいででした。なんでしたら、休んでも構わないとも……」

「しかし……！」

「お役目に励まれるのは、結構でございますが……そのように強く『アスクラピア』の加護の影響をお受けになられては……」

エルは、ほんのりと頬を上気させ、なぜか機嫌が良さそうだ。細かい指先を宙に漂わせ、俺の腕を指す。

「……」

両腕には、未だはつきりとアスクラピアの蛇が浮かび上がっている。身体が魔法酔いの影響から抜け切っていない証拠だ。

エルが、そつと俺の胸を押し、もう一度ベッドに押しやる。

「……まだ、アスクラピアの御力を失っていないかったですね？」

「……」

知るか。親父が出来る。俺が出来て何の不思議がある。それとエルの上機嫌は関係があるのだろうか。今朝のエルは、とにかく饒舌だ。普段はこの半分も口をきかない。

短く息を吐く。慌てても仕様が無い。

「アキラさまは、そのことを非常に評価されておいででした」

「……！」

ばれたのか！ エルが話した？ いや、事態の予測は容易か。これは参った。隠していたことを何と非難されるか分かったものでは

待て、評価している？ 非難の間違いでなく？

わからん。俺が秘密を持っていたことをアキラが喜ぶとは思えない。

第9話 勘違い（前書き）

アキラ視点です。

第9話 勘違い

赤い煉瓦拵えの新兵舎の執務室で、アキラ・キサラギはこれ以上ないくらい上機嫌だった。

「よし、その棚はそこに置け。そつとだぞ」

にやにやと緩む頬を隠すこともせず、運び込まれる備品の置き場所を指示していく。

「大将、ご機嫌ですね？」

副長の不在に代わり、この引越し作業の指揮を執る壮年の騎士が問いかける。

「ああ、ボクは気分がいい」

アキラは否定せず、手に持ったタクトで拍車の付いたブーツをぴしゃりと叩く。

副長をいじめ抜くことに定評のある、あのアキラ・キサラギが、その副長の不在にも拘わらずこの上機嫌。こりやまた不思議なこともあったもんだ、と壮年の騎士は眉を吊り上げる。

「副長は、そんなに具合が悪いんですかい？」

「ああ、とてもね。休むよう命じてある。……だからと言って、手を抜くなよ？ 奴が居なくても平気だつてところを見せてやれ」

「へい」

と答える彼も傭兵上がりの出身だ。気取らない彼らの性分は、アキラにはとても好ましいものに感じられる。

「なあ、レオ　副長は、神父の息子だよな？」

「へえ、そうですが」

「だとすると、アスクラピアの洗礼を受ける機会は十分にあったわけだ」

「まあそうですね」

「アスクラピアの力を使う神官の必須条件は、処女童貞だよな？」

これまた下世話なことを言う。壮年の騎士は眉根を寄せる。

「それがなにか？」

「だったらさ、副長は……なのか？」

「ああ……」

そりゃ、ネタだ。騎士は苦笑いを浮かべる。

飲む打つ買うは男の業。傭兵たちにとっては宿命のようなものだ。レオンハルト・ベッカーもまたしかり。色街で遊びほうける姿は何度も見かけたことがある。色を好むのは、男ならやむを得ぬこと。

傭兵上がりたちが、副長を『神父の息子』とおちよくるのは、そういう意味だ。罰当たりめ、と呼んで遊んでいるのだ。ちよつと泣き虫で、根は真面目な彼をからかっているに過ぎない。

処女童貞であることと、アスクラピアの力の行使は、なんの関係もない。そもそも、レオンハルト・ベッカーは神官ですらない。

壮年の騎士はそれを説明しようかどうか、少し悩み……結局は止めておいた。あの若い副長をからかうネタが一つ増えただけのこと
に過ぎなかったからだ。

第10話 嵐の前

大隊長三名の罷免、更迭。この事態をどう処理するか。第12旅団結成式典まで、あと三日もない。

新しい兵舎の執務室は、連隊クラスの時より間取りが広く気分がいいが、このトラブルの対処を間違えれば、その上気分も長続きしないだろう。

「部隊への発表はどうしますか？」

「取り繕ってもしょうがない。事実を公表しろ」

アキラは新しい椅子が気に入ったようだ。頻りにひじ受けをなで回している。以前のものは、材質が気に入らないとこねていたのを出す。

「で、後任はいかがなさいますか？」

「……」

アキラは煙るような表情でこちらを見る。どうせ他人行儀な言葉遣いが気に入らないとか言い出すのだろう。

溜め息を吐く。最近の俺は溜め息ばかり吐いている。

「……アキラ、あなたのためです」

「わかってるよ」

おお、聞き分けがいい。どうしたことだ？ 日を置いて直ったのだろうか。

「おまえにも案があるだろう。聞かせてくれないか？」

言葉遣いが直っている。キミとか優しく言われたら、どうしようかと思った。

……直ったんだ。つーんと鼻の奥が熱くなる。よかった。本当に、よかった。

「ばっ、バカ！ 今は執務の最中だぞ！」

涙ぐむ俺にアキラの叱咤が飛ぶ。普段なら身を小さくするそれすらも暖かく聞こえる。

「……すいません。アキラ、あなたが……」

「ぼ、ボクは、変わるって言ったからな……いい子になりたいんだ」

直ってないのかもしれない。

どちらとも決め兼ねてしまう。だが、瞳の色の危うさはかなり薄まった気がする。それがどうしてかは分からないが。

話を濁してしまった。一つ咳払いして、続ける。

「後任の案ですが、二つあります。一つは人事部に計らって、佐官クラスの人材を用意してもらう」

この時点で、アキラは首を振った。

「却下だ。もう一つにしろ」

「しかし……」

と俺は再考を求める。

アキラ・キサラギは優秀な軍人だ。優秀過ぎるくらいがある軍人だ。己の立場に疎いところがある。

自己の直属部隊『第七連隊』。指揮官に貴族の子弟を含まない。ということの意味を、アキラは知っているのだろうか。

「わかってるんだろ？ ボクの気に入る案を」

アキラの言葉に喉が混ざる。

考え過ぎだろうか……そんな気がしてくる。

「……はっ、それでは大隊の副官クラスに代理という形で、後任を任せましょう」

代理の字は、次の出征が終わり次第、取ってやればよい。副官クラスの三名は下士官だが、目の前にぶら下がった出世のチャンスに

発奮するだろう。そのやる気を生かすのはアキラの仕事だ。

この展開は既に予想してあった。関係書類に、アキラのサイン一つで事が進むよう、既に根回ししている。

「それではこれにサインを」

「ん」

ここまででは予定調和だ。アキラの方でも、手際の良さに驚くことはない。

阿吽の呼吸とでもいうのだろうか。俺を仕込んだのはアキラだが、叩けば響くこの関係は居心地がいい。

アキラも同じ気分なようで、僅かに笑む。

「一二〇〇に執務室に来い。今日は、一緒に食事をとりたい」

ひとふたまるまる…軍の時間呼称だ。食事の誘いであるが実に色気がない。だが、それが返って落ち着く。俺もアキラも、ただの戦争屋なのだ。それを認識する。

「なあ、レオ……」

書類を手に関係各所に行こうとした俺を、アキラが呼び止める。

「おまえ、アスクラピアの加護を受けていたんだな……」

ここで来るか。予想していたが、若干表情が歪むのが自分でもわかる。

「あつ、いや、隠していたのを怒ってるわけじゃないんだ」

「…?」

「その…恥ずかしいと思う気持ちは、理解できる……」

見る見るうちに、アキラの頬に血の気が上る。

「ボクも……だ」

またわからんことを……。

「じろじろ見るな！ 行けっ！」

突然、怒鳴られた俺は、這う這うの体で執務室から逃げ出した。

大隊長三名の更迭処分が公表された。

この一件が旅団内部にどのような波紋をもたらすか。取り敢えず、結成の式典を前日に控えた今、元第七連隊に限っていえば、動揺は少ない。

元々、評判のよくなかった連中だ。致し方ない出来事なのかもしれない。

大隊長の地位を引き継いだ副官たちも、困惑しながらも、運よく巡ってきたこのチャンスにやる気を見せている。

だが、アスペルマイヤー、バックハウスの両連隊については、大きな動揺があったようだ。

当然だ。結成目前に、自ら部隊の弱体を招くこの人事。動揺のない第七連隊の方がどうかしているのだ。

アキラの掌握能力がそれだけ優れているということの証明なのだが、それがアスペルマイヤー、バックハウスの両連隊に反映するまでは、今しばらくの時間がかかりそうだ。

結局、第七連隊には隊長は置かず、アキラの希望通り直属の部隊として、彼女自らが指揮を執ることとなった。新しい大隊長三名の上に、直接団長のアキラがいるということになる。

さて、この『旅団』であるが、エミールア騎士団ではこれを『戦略上』の一単位としている。『戦術上』の一単位である『連隊』との違いは、戦闘での勝利を至上の目的とする『連隊』に対し、『旅団』の目的は『統治』を至上とする点である。

第12旅団の結成は、新たな戦乱の予感を孕んでいる。

これに関するアキラの推測はこうだ。

「またアルフリードとの間に、大きな戦が起こるな。これまでにない規模のものになるだろう。軍上層も腹を括ったということかな」

叩き上げの将官『アキラ・キサラギ』と傭兵上がりを多く含む超
実戦部隊『第七連隊』そして、万夫不当の『アスペルマイヤー』。
性悪女こと知恵者『バックハウス』。この組み合わせに何も思わな
い者はいない。

さらには『旅団』の目的と性質。これまでは一戦場の事だけを考
えるだけでよかったが、これから先はそういうわけにもいかない。
アキラと俺は、『戦略上』の『統治』について議論を深めねばな
らなかった。

その話し合いで緊張感溢れる執務室に一人の来客があった。
ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだ。

第11話 万夫不当

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、門閥貴族にして、純粋な狼の獣人だ。

狼の獣人は体格と運動能力に優れており、その戦闘能力は他の種族とは一線を画する。狼の獣人のプライドはその類い希なる戦闘能力に裏打ちされたものであり、基本、彼らは優生主義だ。

優生主義……ぶっちゃけて言ってしまうえば、強かったら何やって許される。弱い奴は生きる資格がない。弱い奴は、強い奴の食い物にされるために生きている。そういった主義思想のことだ。

ただ、純粋にそうか、といえばそれは違う。狼の獣人は非常に義理堅い。一度受けた恩は、死んでも忘れない。その反面、とても粘着質で一度憎しみを抱くと、これも死んでも忘れない。

こんな言葉がある。

狼の決意は、鉄より固い。

俺がジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーに出会ったのは五年前のことだ。

当時のアスペルマイヤー少佐が率いる一個大隊は、国境にてアルフリード騎士団の一個連隊と不意の遭遇戦に陥った。

狼の獣人は、粘り強く辛抱強いが、その反面、決断に欠けるところがある。アスペルマイヤーも多分に漏れず、戦術的撤退 所謂『逃走』の指示を出しそびれた。

万夫不当の強さを誇るアスペルマイヤーであるが、大隊と連隊では数に差があり過ぎる。それでも戦線を維持し続けたのは、彼女の勇によるところが大きいだろう。だがそれが、戦況の泥沼化を招い

たのは否定できない事実だ。

アルフリード側からすれば、一個連隊二〇〇を用い、何故、一個大隊六〇〇を制圧できないのか、という苛立ちがあり、一方、アスペルマイヤーは無敵の戦闘能力に裏打ちされたプライドが、戦況に於ける不利を感じながら、なおも撤退を許さぬというジレンマ的状况を構築しつつあった。

結局、戦況を決定づけたのは、一本の矢だ。

ふらり、と飛来したそれは、すんとアスペルマイヤーの胸当ての下に命中した。

肺をやられたアスペルマイヤーは、見る見るうちに消耗し、ついには立ち上がることもできなくなった。

アスペルマイヤー一人で維持し続けた戦況は、瞬く間に総崩れの様相を呈し、重傷を負った彼女を擁したまま、大隊は見るも無残な撤退戦を余儀なくされた。

少数に手こずらされたアルフリード側の追撃は凄まじく、大隊からは戦死、逃亡者が続出し、俺もいよいよ進退窮まった。

ここで俺は一つの決断をした。

最後まで、アスペルマイヤーに従軍することを決意したのだ。

彼女は狼の獣人だ。この苦境に最後まで付き従った者を、彼女は絶対無下にせまい。その思惑があった。

たとえ、アスペルマイヤーがこの地に斃れようと、その一族が恩を返す。死んでも忘れぬというのはそういうことだ。他の者が返す。

うだつの上からぬ傭兵稼業にも飽きて来たころだった。たった一つの己の命。乗るか反るか、ここで張るのも悪くなかった。

そして運命の日がやって来る。

その晩、アスペルマイヤーの本陣は悲惨で、ついに副官までも逃げ出した。率いた大隊六〇〇の内、半数が戦死し、残りは相次いだ逃走のため、ついに五〇騎を切っていた。副官の逃亡も止むなし。

むしろ頑張った方だろう。

だが、アスペルマイヤーの武運は尽きていなかった。残騎を率い、逃亡した副官が見捨てた一人の傭兵　俺だ。

朝、目を覚ますと本陣で苦痛と無念に唸るアスペルマイヤーと俺を残し、部隊は消えていた。

『肺』の治療は難しい。矢傷を塞いでも、溜まった血はどうにもならない。一度萎んでしまった肺は『治癒魔法』だけでは治らない。俺が『奥の手』の使用を渋った理由がそれだ。張り切って進み出て、治りませんでした、では済まないのだ。

一度傷を塞ぎ、溜まった血を出すためもう一度傷を付け、血を吸い出すという地獄のような処置を行った。出血量は凄まじく、見立てでは、アスペルマイヤーが命を取り留める可能性は三割もないだろうと思った。

しかし、俺にはもう、アスペルマイヤー以外に賭けるものはない。彼女の狼の血に賭けるよりない。

そして、万全の呼吸を取り戻したアスペルマイヤーは、見事に俺の期待に応えた。というより、応え過ぎた。

迫り来る追っ手を、悪鬼羅刹もかくやという活躍で、引き裂き食い破り、捻り潰した。

アスペルマイヤーの怒りは凄まじく、追っ手を叩き潰した後も止むことはなかった。帰国後、己を見捨てて逃げた副官を素手で引き千切った光景は、一生忘れないだろう。

その反面、最後まで付き従った俺は、とんでもなく厚遇された。傭兵でありながら、騎士分として扱われ、そんな俺をアスペルマイヤーは『レオ』と呼び、俺もまた、彼女を『ジーク』と呼ぶことを許された。

そこから二年間はよかった。

ジークの隣りにいる限り、俺は命の心配をする必要がなかった。傭兵の俺には、それだけで充分幸せだった。イザベラ・フォン・バツクハウスと知己を得たのもこのころだ。イザベラは、俺のことを

『ジーク専用救急箱』と呼び、それを怒ったジークが否定するといふことがあった。

命を張った甲斐はあった。狼の獣人に恩を売り、エルフとの間に知己を得た。しかも、二人ともが門閥貴族のお偉いさんだ。一介の傭兵には、過ぎた財産だった。

そしてジークからの推薦を受け、ついに騎士になることになった俺だが、その叙勲式でアキラ・キサラギに出会ってしまう。

この時、アキラ・キサラギは中佐。ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは一度部隊を壊滅させた科で未だ少佐だった。

ジークは優生主義だ。絶対の強者をこそ上に戴く種族主義からか、軍の人事には口出ししなかった。

そのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが、第12旅団の新兵舎で執務に励むアキラ・キサラギの元に、たずねてきた。

第12話 修羅場

先ず、変化を見せたのはアキラだ。

コバルトブルーの瞳が暗く淀み、活発な意見を出して、俺と意見交換していたのが、突然、無口になった。

後で思ったことだが、猫の獣人は危険察知に優れている。その血を引くアキラの敏感なセンサーが、アスペルマイヤーの持つ何かに反応していたのだろう。

執務室のドアを叩く音が無機質に響き、アキラが許可を出すと同時に、それは現れた。

「やあ、団長。おや……レオもいるね」

ゆったりとした口調に、ハスキーな声。

狼の獣人は体格に恵まれている。アスペルマイヤーは、俺より頭一つ分はでかい。豊かな胸に、ほっそりとした、だがムチのようにしなやかな腕。八頭身の均整のとれた軀軀。銀色の髪は裾の当たりで一つに纏めてあった。ぴん、と立った狼の二つの耳になんだか愛嬌がある。

「アスペルマイヤー……！」

敵意を剥き出しにして、低く唸るようにアキラが呟く。既に、髪が巻き上がり、悪魔のような形相だ。嫌っていたのは知ってるが、この様子は尋常ではない。

「団長の方から、挨拶に来ると思ったけど。まあ、ばたばたして
るみたいだったし、私の方から来てあげたよ」

なんというアスペルマイヤーの傲慢。

上官であるアキラに向かって、来てやった、とは。

「ボクは呼んでない……消えろ！」

アスペルマイヤーは眠そうな視線を向ける。

なんなんだ。この二人は、最初から喧嘩腰だ。しかし、謎なのは、
アスペルマイヤーの態度だ。彼女が上官に敵意を剥き出しにするよ
うなことは、これまでなかった。

「そういうわけにもいかないよ。レオから、よろしく頼まれている
からね。私は、レオのためにここに来たんだ」

「……！」

ぎろりとアキラが睨み付けてくる。

その顔に書いてある。おまえ、一遍、死にたいか？ と。

勿論、俺は死にたくない。もう少し稼ぎたいし、エルも学校にや
らなきゃならん。

「アスペルマイヤー大佐！ 団長に失礼です！」

「……ジーク」

呟いて、アスペルマイヤーはふわりと笑う。

こんなときだが、ドキッと一つ心臓が跳ねる。

戦場の女神。そんな言葉が脳裏にちらつく。

「……ジークだ。ほら、言ってみて……私は何も、変わらない。レ
オも変わってない。だから……」

のんびりとした口調と共にするりと伸びた指先が、俺の唇に触れ
る。

「アスペルマイヤー！ きさまあああ！」

ついにアキラが激発した。

机を蹴って跳ね上がる。同時に、チンツという鞘走りの音が耳を衝く。

やばい！

アキラの得意技の『居合』だ。こればかりは、まずすぎる。神速で繰り出される抜き打ちの斬撃は、いくらなんでも

「ジーク！」

叫びにも似た悲鳴。一瞬、アキラが固まる。微弱な遅れ。それがもたらした結果は劇的で

はらり、とジークの銀髪が数本宙に舞う。

「びつくりした……」

ジークは、ほうと息を吐く。

躲した？ あれを？ アキラの『居合』を？ いや、アキラが外したのか？

とにかく ジークは無事だ。

「イザベラの言うとおり、おまえはやっぱり狂っているね……」

厳しい表情でジークが吐き捨てる。

対するアキラは、刀を構えた姿勢でふらりと動いた。これがまた、何とも言えず嫌な動きだ。音も気配も何もない。特殊な歩法であることは疑いない。

「アキラッ！ やめてください！」

一喝する。こんなことがどこまで意味を持つかは分からないが、やらないよりはましだろう。

対するジークは、油断なく距離を取りながら言う。

「無駄だよ。猫は、レオが気になって、気になってしかたがないんだ」

なぜかジークは帯剣していない。護身用のレイピアすら腰に差していない。これが知らしめる事実はなんだ？　なぜ、ジークは丸腰なんだ？

ジークはさらに言い募る。それはまるで、尽きせぬ恨みを晴らすかのようにだった。

「猫はね、レオがいないと落ち着かない。言うことを聞かないと腹が立つ。自分以外の女を見ると、気が狂いそうになるんだ。もうずっと、ずっとそうなんだよ。三年以上前から……」

「！」

見た目にも鮮やかな、アキラの動揺。

「猫は、レオを嵌めたんだ。三年前の叙勲式……理由は何でもよかったんだ」

俺を嵌めた？　いやそんなことよりも……アキラが動揺している。ここを置いて、場の收拾の機会はない。

「だまれ！　ジーク！」

俺のその一喝に、えっ、とジークが目丸くする。アキラの方も驚いてこちらを見る。

この機を逃す俺じゃない。生じた隙に飛び出して、アキラの首筋を捕まえる。猫なら　これで上手く行く……はずだ。

「……」

くてり、とアキラが身を任せてくる。

やはり。アキラは猫の獣人の血を色濃く引いている。

かつて、猫の獣人は四本の足で動く四足獣だった。親が子供を運ぶ際、首筋を咬むようにして掴み、移動した。その際、子供には防衛本能が働き動けなくなる。移動の妨げをしないように。その名残から、猫の獣人は首筋を掴まれると動けなくなるのだ。

与太話の類いだろうと思っていたが、実際エルで試したときは、瞬きすらせず完全に動きを停止した。ハイブリッドであるアキラに通用するかどうかは、完全に賭けだったが。

ジークは、ぱちぱちと瞬きをしている。微動だにしないアキラの様子に驚きを隠せない様子だった。

「これは驚いた……。レオ、なにをしたの？」
「……」

ジークにだけは、絶対に言えない。アキラを嵌めに来たのだから。

「ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー大佐。今すぐ、執務室から退去してください。これは第12旅団副長としての命令です」

「命令？」

「そうです。どのような経緯があれ、今の私は、キサラギ団長の忠実な副長です」

「ああ、なるほど」

ジークは深く頷いた。

「レオは、私がキサラギ団長より劣ると思っているんだね。それはよくわかる。今の私は、大佐だからね。いいよ。そのうち、力で奪りに来るから」

力関係に拘る狼の獣人らしい言い草だ。ジークは嫌いではないが、この優生主義というやつは好きにならない。

「あなたがアキラに敵うとは思えませんが、できるんですたら、どうぞ」

「いいね、それ。力づくっていうの、嫌いじゃない」

ジークは俺の胸で瞬きすらせずに、身を任せるアキラを見下ろした。

「これはイザベラのやり方で、私の趣味じゃない」

言って、長い舌で、ぺろりと俺の頬をなめ上げた。
ぞぞぞつ、と背筋に悪寒が走る。

「少し遅れたけど、これからそれを取り戻したいと思う」

頭が、ズキズキと痛んだ。

ジークは、なぜ今頃になって来たのだろう。

アキラは俺に何を隠しているのだろう。

第13話 暗雲

「このことは、レオの方に貸しておこうか。言ってること、わかるね？」

そう言い残し、ジークは去った。

俺の胸の中でアキラはぴくりとも出来ず、じつとりと額に汗を浮かべている。

「いいですか、アキラ。無理にでも、俺の話を聞いてもらいますよ」

「……」
アキラは瞬きすらしない。今頃、強すぎる『猫』の本能と戦っているのだろう。

「先ず、アスペルマイヤーは帯剣していません。武装していない門閥貴族に剣を向ける。これがということか、あなたには理解できますよね？」

「……」
アキラの瞳が僅かに揺れる。

「おそらく、知恵を授けたのは『バックハウス』。性悪女こと、知恵者『バックハウス』です」

「……」
「あなたは狙われているかもしれない。この数年で、あなたほど力を付けた者はいません。爵位を上げ、さらには『戦略』レベルの軍隊を所持している実戦経験豊富な将校は、あなた以外に存在しません」

「……」

「アスペルマイヤーの安い挑発に乗らないでください。あなたなら、できるはずです」

「……」

胸の中で、アキラの揺らめきが増すのがわかる。コバルトブルーの瞳に、理性の光が灯り出す。

「……最後に。これが一番重要です。俺は、アキラ・キサラギの副長です。何があるうと、あなたを裏切りません。これだけは信用してください」

正確には、裏切れない、だ。

アキラが貴族である三名の大隊長を処分したことで、俺の去就は決まった。

アキラ・キサラギの子飼いの軍隊『第七連隊』。大隊長以上の指揮官で、貴族はアキラ以外いない。その『第七連隊』の筆頭はだれだ？

アキラ・キサラギが最も目を掛けた子飼いは誰だ？

答えは、元傭兵のレオンハルト・ベツカー。俺だ。

場合によっては国すら揺るがす力を持つ異端児『アキラ・キサラギ』。

指揮官に貴族を含まない軍隊『第七連隊』。

門閥貴族は、動きを見せた。ならば、自ずと俺の去就も帰結する。有力な外戚を持たない。何の背景もない平民のレオンハルト・ベツカーの去就など、当の昔に決まっている。悩めるような立場じゃない。

一番大きな反省点は、この問題に気づくのが遅すぎたことだ。気づくのが早ければ、別の身の振り方もあったかもしれない。

だがなぜだ……まだ足りない気がするの。理屈でない何か……もっと、こう……俺自身にまわりつくような、何か不吉なものの存在を感じる。

「…離しますよ。暴れないでくださいね」

「……」

アキラの瞳が、怒りの色に燃えている。不吉だが、狂ってはいない……そう信じたい。

手を離す。掴むポイントや、その強弱は俺だけの秘密だ。

「……」

アキラはしばらく黙っていた。苛立っているようだが、頭は回っているようだ。

「……ボクに何をした」

「教えません」

ぎりつと、アキラが歯を鳴らす。だが、聡い彼女のことだ。しばらくすれば、答えに行き着くことだろう。

「……貴族どもとは、やりあうことになりそうか？ 私見でいい、聞かせろ」

「俺の予想では、まだ。今日のは、揺さぶりというところですか。ですが不確定要素が多すぎます。もっと調査をしてからでないと、なんとも……」

「……まだ早いな。せめて、少将クラスでないと」

俺は少し呆れてしまう。

『少将』というと、指揮権は『師団』クラスだ。このどら猫は、それだけの権力があれば、貴族を敵に回しても、やり合えるつもりなのだ。

国でも奪るつもりか？

そこでアキラが床を踏み鳴らす。

「くそっ！ むかついて考えが纏まらない！ レオ、なんとかするんだ！」

むかついて、それを俺に、処理させるのか？

いかん。俺の理解を超えている。

アキラも、ジークもそうだが、行動の原理が俺とは違い過ぎる。

猫の習性に、狼の優生主義。どちらも俺の理解からは遠い。遠すぎる……。

「早くしないか！ おまえなら、何かあるだろう！」

「うわあ！」

アキラの怒鳴り声に反応してしまう。俺のは悲しい習性だ。

第14話 静かな夜に

兵舎に帰ったのは夜半過ぎてからだった。

アキラの怒りは、激しく、なおかつ深刻だった。

だが、思考に関してはいささか冷静な面を残しているようで、俺にいくつかの指示を出した。

現在の状況で門閥貴族と事を構えるのはまずい。アスペルマイヤー、バックハウスの両名の意図、背後関係を調べることに。

二人への対処法。

アスペルマイヤー、バックハウスを毛嫌いするアキラだが、二人の所有する戦力には魅力を感じているようだった。なんとかして、取り込みたい。という意志を強く覗かせた。

それに関しては、俺も賛成だ。戦場において、数は力だ。指揮官である二人はともかく、『第五連隊』と『第八連隊』の騎士たちの信望は得られたほうがよい。

これらの問題に対する方法を、数日以内に書類の形にして献策せよ、とのことだ。

「少佐、そろそろおやすみになられた方が……」

思索にふける俺に、エルがいつものように言うてくる。

「ああ、そうするよ」

エルが来れば、仕事は終わり。そのように俺は決めている。

眠る前に、暖かい飲み物を頼み、エルがやって来るまでの間にこれからのことを考える。第12旅団の目的が『統治』である以上、任務には戦闘後の『治安』や『警備』も含まれる。アキラも俺も、権限は増すがその分、多忙になる。一度、出征してしまえば、おいそれとこのニードーサクソンには帰れない。

「どうぞ」

エルの差し出した暖かいココアを一口含みながら、薄暗い室内で見つめ合う。

「なにか？」

「……なあ、エル。学校に行って見る気はないか？」

「ありません」

エルには一言で切って落とされた。

少しくらい、考えてくれたっていいだろう。うむむ、と思わず唸ってしまう。

「だから……」

俺はエルに『旅団』の目的とその存在意義を説明する。

「もう、帰って来られないかもしれないから、ということですか？」

そのエルの問いかけに、静かに頷く。

帰って来られないかも、の中には当然俺の戦死も含まれる。だとすれば、ひたすら気掛かりなのはエルの行く末だ。

「退役なさるのでは……？」

「いつになるかわからん」

窓の外では、夜の虫が鳴いている。静かな夜だった。

「それでは従軍いたします」

「なにを馬鹿なことを……おまえは騎士ですらないだろう」

「では、ここで少佐のお帰りをお待ちいたします」

「だから……」

これは駄目だ。話が堂々巡りになってしまう。

「……修道院に進み、尼にでもなります」

「なぜ、その若さでそんな世捨て人のようなことを言う……」

頭が痛くなつて来た。本気を出したエルは中々、手ごわい。いつもなら折れてやるが、今回ばかりはそうも行かない。

「譲らんど。今回ばかりは折れてもらう」

「……」

沈黙。そして、いつものようにエルは無表情だった。

手を振って、エルを追い払う。下がってくれ、の合図だ。この際、彼女の意志はどうでもいい。

「……」

エルは出て行かなかった。沈黙を守り、ひたすら俺の目を見つめ続ける。

「少佐は、まだ生きておいでです……」

「ああ、だからなんだ」

「……レオンハルトさまの、お命は、エルのもです」

「……！」

激しく目を逸らす。息苦しくて、とてもでないがエルを見ることができない。

「そのうち、頂戴に上がります」

「……」

覚悟はできている。頷く俺を見て、エルはうつすらと笑った。

「なるべく、レオンハルトさまのお命が、一番輝かしいときに……」

そしてエルは去る。遠くでは、夜の虫が鳴いていた。

第15話 12旅団結成式典

第12旅団結成式当日。

正面切って、アスペルマイヤー、バックハウスの両大佐と会わねばならないアキラは、ぴりぴりとして機嫌が悪い。

新兵舎の前では、第12旅団総員5732名が集結して、大元帥であるカロツサの訓辞の言葉を聞いている。

俺のよくない癖で、あまり有り難いお話を聞き過ぎると、つい欠伸をしてしまいそうになる。

欠伸をかみ殺していると、それを遠目で見たアスペルマイヤーが、口元に笑みを浮かべ、バックハウスが呆れたように肩を竦めていた。前に立つアキラが振り返り、囁くようにこう言った。

「おまえ、本当に死にたいらしいな……」

「へっ？」

恩讐も一昔。喉元過ぎれば熱さを忘れる、とでも言うのだろうか。三年前を彷彿とさせるこの状況にあっても、今の俺が緊張することはない。

笑みを返すと、一瞬、アキラからだす黒いオーラのようなものが吹き上がったような気がしたが、気にせずにおいた。

カロツサの有り難い訓辞が続く中、アキラに耳打ちする。

「アキラ……表情が強ばってます。いろいろありましたが、めでたい式典です。もっと朗らかに……」

「おまえを殺してからそうするよ。まったく、ろくなもんじゃない……」

アキラはしばらくの間、口の中でもごもごと呟いていたが、表情

から緊張は消えていた。

続いてアスペルマイヤーとバックハウスが決意の言葉を述べ、アキラがそれに倣う。

最後に、この三名がニーダーサクソンに命を捧げる言葉を述べ、カロツサ元帥に忠誠を誓った。

その後は、兵舎の前に張られた大きな天幕の中で、結成の祝賀園遊会が開かれることになり、俺を含めた第12旅団の主要人物が、一様に顔を面した。

出会いは、思惑を超えた波乱からはじまることになった。

「やあ、クソ犬じゃないか。こんなところで何をしているんだ？」

のっけから敵意を隠さぬアキラの言葉に、俺は飲みかけたシャンパンを鼻から吹き出すことになった。

さすがのアスペルマイヤーも、これには顔を引きつらせ応戦した。

「これは猫団長。ご挨拶だね」

血の気を飛ばし、呆然とする俺に、バックハウスが歩み寄って来る。

イザベラ・フォン・バックハウス。

第八連隊の隊長で、階級は大佐。軍内部では『知恵者』。その根性の悪さから『性悪女』とも呼ばれている一癖も二癖もある人物だ。俺の考えでは、武人でありどこか単純なところがあるアスペルマイヤーより、参謀タイプのバックハウスの方が役者は上だ。

「久しぶりね。救急箱」

イザベラ・フォン・バックハウスはエルフ特有の長い耳に長く美しい金髪を靡かせ、柔らかな笑みを浮かべた。

救急箱……俺のことだ。まあ、その呼び方も昔からのこと。門閥貴族であり、プライドの高いエルフに、こんな調子ではあるが、口を利いてもらえるのは、そうはないことだ。

「はい、イザベラさま。おひさしぶりです」

「面白いことになって来たわね？」

イザベラが、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「面白い？ あの二人の争いがですか？」

そのうち、血の雨が降るぞ！ 長い耳に向かって叫んでやりたい。

「まあ、なんにしても……」

イザベラは溜め息を吐き出した。

「ジークはようやく本気になったようだし……あれでよかったのよ」
全然よくない。

先日の二人のやり取りを、手取り足取り説明してやりたい。

「それで……救急箱は、どちらが好みなの？」

「はい？」

それは思ってもみない質問だった。

「もうしわけありません。意味がよくわかりませんが……」

「呆れた。もちろん、女としてよ」

「はあ…女性としてですか」

ぴんと来ない問題だった。

アキラに関しては、その好意はかなり歪んではいるが感じている。それだけだ。何も思わない。女性としてというより軍人としては尊敬している。

ジークに関しては、彼女は門閥貴族だ。平民の俺とは違い過ぎる。最近は疎遠でもあったし、女性としては美しいとは思うが、それだけだ。特に恋愛感情はない。

「抱きたい、とかないの？」

「ありませんね」

なんてやらしいエルフだろう。少し呆れてしまう。

「本気で言ってるの、それ？」

「はい」

イザベラはなぜか真剣そのものの表情だ。醜い言い争いを続けるアキラとジークを見つめ、それから俺を見つめる。

「……」

それきりイザベラは黙り込んでしまった。

深く青い瞳が揺れてさ迷っている。

素直に、エルフという生き物は美しいと思う。愛したいとは思えないにしても。

「さて、そろそろ二人を止めてきますね」

そう言い残し、俺はその場を立ち去った。

「抜け、けだもの。ボクはおまえを殺したくて、うずうずしてるんだ」

結成の式典は終わり、カロツサ元帥は城に帰ってしまった。そのため、アキラの言葉に遠慮はない。

「卑怯者の猫。その手には乗らないよ」

ゆつたりと返すジークも、金色の瞳に怒りの炎を揺らめかせている。

一触即発の空気を撒き散らす二人を前に、俺は一度頬を叩いて気合を入れる。

二人とも帯剣している。この場で先に剣を抜くことの不味さは、熟知しているのだろう。お互いに挑発しあい、睨み合うがそれだけだ。

「はいはい。団長、ここまでです」

アキラの肩に手を置く。

「レオ、遅いぞ！　どこで油を売ってたんだ！」

「なに言ってるんですか。油を売ってるのは団長でしょう」
ぎろりとアキラを睨み付ける。

「仕事は山積みです。式典の後も書類仕事があるでしょう。こんなところで何をやってるんですか……」

「そ、それは……おまえがやればいいだろう！」

コバルトブルーの瞳は怒りに燃えているが、理性の光を失ってはいない。

これが消えた時がまずいんだ。全ての理屈が通用しなくなる。アキラの癪癪にも、だいぶ慣れて来た。聞こえるうちに言っておく。

「俺の仕事は終わってます。後は団長が確認して、サインするだけです」

それに、とアキラの目を見て付け加える。

「例の案件に関する献策書類が、既にできています。確認してほしいのですが」

アスペルマイヤー、バックハウス両大佐に対する対処の献策だ。

「本当か？　早いな。自信はあるんだろうな」

「はい」

「つまらない出来だったら、承知しないぞ」

「はい」

「……」

アキラは、俺の襟首を引っ張って視線を合わせると、何か言いた

そうに唇をなめていたが、

「おまえはボクのことだけ考えていればいいんだ。わかったな……」
そう言っ、ギロリとアスペルマイヤーを一瞥し、執務室の方へ
去って行った。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーとアキラ・キサラギの
激突は必至だ。それは最早避けられないところまで来ている。

どちらも死なせたくない。どちらにも、仲間の血で己の手を洗う
ようなことはさせたくない。俺の本音はそこにある。

「レオ、猫のあしらいがうまいね」

背後からそつと、ジークの手が肩に掛けられる。

「あなたのためにしたことではありませんよ、ジーク」

「言っね。でも、つれないレオも嫌いじゃないよ」

やがて、どこからか現れた楽士たちが手にした楽器で緩やかな音
楽を奏で出した。

洒落てはいるが騎士の兵舎においては、ふざけているとしか思え
ないこの演出は、バツクハウスあたりの仕業だろう。

「カドリールだね」

四組の男女が四角になつて踊るダンスだ。このダンスは、基本的
な幾つかの動作を覚えれば、誰でも踊れる。その気安さから、最近、
宮廷の流行になりつつある。

ジークの声に驚いた様子はない。この演出を知っていたのだろう。

「踊ってくれるよね、副長」

「……」

お道化たように言うジークの手を取る。この誘いを断るのは、立場的に非礼にあたる。

「私の方が背が高い。レオは、女のパートを踊ってほしいのだけど……」

「はい」

ダンスは腐るほどアキラとやった。これも騎士の礼節を知る上で必要なことだそう。だから、嗜みはある。

ぐいつ、と腰と手を引き付けられる。

「う……」

痛くはないが万力のような力強さに、思わず唸る。

「ジーク……これは、そういうダンスでは」

「いいんだ。ずっと、こうしたかった。だから、やっているんだ」

カドリールの緩やかな調べに合わせ、くるり、くるり、とジークは回る。

「私は少し、考え過ぎていたようだ。らしくないことにね」

一方の俺は、踊るというより振り回されるという表現が正しい。

ジークの切れ長の瞳が、しつとりと潤んでいる。

「口づけしてやろうか、レオ」
「なっ？」

怯む俺を無視して、くるり、とジークは回る。パートナーの交替にも応じず、ひたすら俺とのダンスに興じる。

「くっ、離せ、ジーク……風紀部に目を付けられるぞ……」

「んん…？ ああ、そんなものもあつたね。さっきからおかしいと思っただら、そんなことを気にしていたんだ」

ジークの金色の瞳に血の色が浮く。戦闘時に見せる精神の昂揚だ。ぎくりとした俺は、青い腕章をした風紀部の騎士に視線を合わせる。

どうだ、アキラだけじゃない。だから俺を止めてみる！ 止めてくれ！ 頼むよ！

訝しげにこちらを見た風紀部の騎士は、一瞬ジークと視線を合わせ、

「ひえっ！」

という悲鳴を残し、逃げるように去っていった。

俺の心の叫びは、風紀部には届かないようだ。

「レオ……私の小鳥……今は籠の中……そのうち、力で奪りに行く

……」

「なにを……」

なにを馬鹿なことを、と力任せに振り解こうとした俺だが、ジークの紅い瞳の迫力がその抵抗を許さない。

カドリールの緩やかな旋律に狂気の調べを乗せ、俺たちのダンスは続く。

「……すごい。想像以上だよ、これは。なぜ私は、一年前……」

ぶつぶつと呟くジークは、狂気を浮かべた瞳に俺以外の何も映していない。

……食われる。

はつきりと浮かぶその光景に、悲鳴を上げそうになったのと同じ

に、カドリールの調べが止まる。

「……もう終わってしまったのか。つまらない……」

ジークは動きを止めた。だが、万力のような剛腕で掴んだ俺の手首を離さない。その鮮血の瞳が、捕らえた俺を離さない。

「うあっ！」

ぎりぎりと締め付けられた手首の痛み、俺はとうとう悲鳴を上げた。

「……！」

刹那、弾かれたようにジークが戒めを解く。

「……いけないね。猫と同じことをしてしまうところだった」

血のざわめきを伝えるように震える己の手を見つめ、ジークは言う。

「今日はこれくらいにしておこうか。少し、興奮してしまった……。私は猫とは違う。レオを壊すつもりはないんだよ……」

振り切るようにジークは踵を返した。

痺れた手首を摩りながら、俺は全身に吹き出した冷たい汗を感じていた。

第15話 12旅団結成式典（後書き）

猫人気ないなあ

第16話 眠れぬ夜のはじまり

「万夫不当のアスペルマイヤー

倒した敵は数知れず」

アキラは唄うように言った。

「鬼より強いアスペルマイヤー

向かうところに敵はなし」

ニードーサクソンの城下町で、民衆がアスペルマイヤーの武勇を称えるときに使う唄を唄いながら、手にしたタクト（指揮棒）で右のブーツをぴしやりと叩く。機嫌がよいときのアキラの癖だ。

第12旅団結成の式典以来、アキラの上機嫌はずっと続いている。俺が献上した策が気に入ったようで、それ以来アキラはずつこの調子だ。有頂天と言ってもいい。

「アスペルマイヤー……あいつには、八つ裂きですら、生ぬるい」

上機嫌の表情とは裏腹に、アキラの吐き出す言葉は非常に剣呑だ。そしてまた、ぴしやりとブーツを引っばたく。

「上機嫌ですね？」

「ああ、ボクは機嫌がいい。おまえのおかげだ」

くいつと、アキラは執務室の椅子を顎で指した。

「座るんだ。ボクから、特別にご褒美をやろう」

偉そうに言うアキラの言葉から、俺は嫌な予感しか感じない。

「いいえ、遠慮します。そんなことより」

「座るんだ！ レオンハルト・ベッカー！」

「うわあ！ 座ります座ります！」

アキラの怒鳴り声に反応してしまう俺……情けない。

「」

アキラは手を後ろに組み、少しお尻を振りながら、着席している俺の回りをぐるっと歩いた。

「おまえの策は中々の出来栄だった。あれを見て、おまえの馬鹿も大分よくなったと思った。そこで、だ……」

「はい」

嫌な予感しかしない。俺は頷いておく。

「ボクらの関係を、一歩前に進めようと思う」

「一歩前に……」

それはなんだろう。小便をするときのコツだろうか……。

アキラは手にしたタクトを、ぐりぐりと俺の胸に押し付ける。地味に痛い。

「……しよつ、と」

言いながら、アキラは俺に馬乗りになると

「○×……！」

キス、した。

あまりの衝撃に、打ち上げられた魚のように足が震える。

目を白黒させる俺の唇を、アキラは一方的に食った。それはあまりにも一方的な凌辱。

そこには、一方的な感情しか感じられなかった。

そしてその行為は、俺が時間を忘れそうになるまで、続いた。頬を紅潮させ、ようやく離れたアキラの視線は、潤み、蕩けていた。

「これは……うん、これから毎日しよう……」

アキラは陶然として、静かに、俺の胸の中で眠りに落ちた。

「それで、部隊編制の件ですが、どうなさいますか？」

「……」

アキラは呆然としている。昼食時も虚ろなままで、意味もなくパンを千切って投げたり、観葉植物の鉢植えにスープをかけたりしていた。

これは……あのキスのせいだと思ふべきなのだろうな……。

まあ、俺もショックがでかったからな。理解はできるが、そろそろ……

「アキラっ！　しっかりしてください！」

「……ん？　またしたいの？」

駄目だ、これは。

「ア・キ・ラ！　今は執務中です！」

「……ああ、次の段階については、もう検討しているところだ。少し、待ってくれないか？」

なんの話だ？　しょうがない。次の案件に入るか……。

「それで、二週間後の実戦形式の模擬訓練ですが、問題ないようでしたら、そのまま俺が立てた計画通りに事を進めて」

「ああ、それなら少し修正を加えてある。この通りにするんだ」
突如、アキラの瞳に力が宿る。

場の空気がぴりりと締まる。やはり、アキラ・キサラギはこうでなくては張り合いがない。

引き出しから出した書類を、ぽんと俺に放り投げる。

「読め」

アキラが出したのは、俺が立てたアスペルマイヤーへの対処法の策略だ。

具体的には、どのようにして彼女を屈服させ、率いる『第五連隊』の信望を得るか。或いは、どのようにして彼女から『第五連隊』の信望を奪うか。

生半可なやり方では、アキラは納得しない。俺は辛辣な策を献上したつもりだ。とても気に入ったように言っていたはずだが……。

「……………」

書類を読み進めて行く。内容はほとんど変わりが無い。だが……
「実行するのが、俺になってますね……………」

「なんだ、嫌なのか？」

値踏みするように、俺を見つめるのは、軍人のアキラ・キサラギだった。

「いえ、そうはいいませんが、しかし…………アスペルマイヤーは、腑抜けになってしまいかもしれませんが、それでも？」

「ボクは、そうしろと言ってるつもりだ」

「はい……………」

てつきり、自分でやりたがるものだとばかり思っていた。

俺が、あのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーを、潰すのか…………。

俺に優しくかった、騎士に取り立ててくれた、あのジークを潰すのか…………。

アキラの眉間に皺がよる。その感情のベクトルが指し示すのは、不快。

「できないのか？」

「……」

「なぜ黙る。おまえは、できもしない策をボクに献上したのか？」

「いえ……そのようなことは」

「じゃあ、おまえの指摘したアスペルマイヤーの弱点を言ってみろ」

腹を括れ！ レオンハルト・ベッカー！

おまえは軍人だ！ 戦争屋だ！ 余計な感情は捨てる！

策を立てたのはおまえだろう！ すべて上官に押し付けるのか！

瞳を閉じ、歯を食いしばる。

さまざまな思いが、胸を駆け巡り、消えて行く。

「アスペルマイヤーの弱点は……それは、彼女が最高の戦士であることです」

アキラはしたたるような笑みを浮かべた。

それを見て、俺は理解した。

ここまでのことを、アキラは全て予想していたのだということを。

夜が更けて、俺は眠れそうにない。

恩知らずのレオンハルト・ベツカー。
裏切り者のレオンハルト・ベツカー。
そんなおまえに、ぐっすり眠れる夜があるというのか？

「少佐、もうお休みになられた方が……」

エルが一日の終わりを告げる。それでも俺は眠れそうにない。

「とても、苦しそうに見えます……」

その言葉に、俺は黙って手を振る。下がれ、の合図だ。

「それでは、なるべく長く苦しめるよう、目の覚める飲み物をお持ちしましょう」

「……」

眠れる夜は、もう終わったのだ。

第16話 眠れぬ夜のはじまり（後書き）

感想の制限がかかっていました！
制限解除します。

第17話 苦悩（前書き）

すいません。短いです。

第17話 苦悩

統帥総本部で開かれる会議では、来るアルフリードとの新しい大きな戦乱の内容が話し合われることになった。

アキラは、第12旅団の団長としてその会議に出席せねばならず、しばらく兵舎を空けることとなった。

「留守は任せたぞ」

「はっ」

特に人目があるわけではなかったが、敬礼でアキラを見送る。

「なんだ、それは……ボクは、そんなことしろなんて、一言も」

「それでは、小官は会議がありますので」

背後でアキラが怒鳴り散らす、知ったことではない。

早々にその場を後にする。

俺自身、佐官の階級を持つ上級士官の会合に出席せねばならず、多忙を極めていた。

「ちょっと、救急箱、あんた、死にそうな顔してるわよ？」

「……」

うるさい、アスペルマイヤーの次はおまえだ。

会議は新兵舎の会議室で行われた。

この新設された第12旅団では、佐官以上の階級を持つ上級士官は九名だが、例外として『第七連隊』の大隊長の代理を務める下士官の三名も呼び寄せ、会議に出席させた。

司会は副長たる俺が行う。

「部隊の再編成の件ですが、模擬戦の結果を踏まえてのことにする
と、団長からのお達しです。何か質問は……？」

挙手したのはアスペルマイヤーだ。

「その模擬戦には、団長も出るの？」

「はい。……ほかには？」

「レオ、顔色が悪いようだけど、どこか具合が」

「アスペルマイヤー大佐、私の体調のことは、本会議になんの関係
もありません。私的発言は、謹んで下さい」

会議は殺伐と、だが順調に進んだ。

俺はなるべく、アスペルマイヤーの方は見ないようにした。

会議終了後『第七連隊』の大隊長の代理を務める下士官の三名を
残らせ、連携を密にするための話し合いを持つ。

模擬戦で『第七連隊』の指揮を執るのは俺だ。

戦いはもう始まっている。手抜きやミスは絶対に許されない。

「副長、ひどい顔してますぜ？」

大隊長代理の三名は、いずれも傭兵上がりだ。そのため言葉遣い
も気安い。

「おまえらに氣遣われるようじゃ、俺もまだまだだな。そんなこと
より、分かっているな？」

「へえ、アスペルマイヤーのやつを、カタにはめるんでしょう？」

「そうだ。ここで張り切りや、団長の覚えもいい。おまえら、稼ぎ
時だぞ？」

「……おう」「」

意気揚がる三人を送り出し、執務室に戻る。

傭兵上がりの仲間三人と話したことで、少し気が抜けたような気
がした。

ありがたいことだ。

第18話 衝撃（前書き）

イザベラ視点です。

第18話 衝撃

「なによ！ なによなにによ！ ねえ、ジーク！ 救急箱のあの態度、見た？」

イザベラは秀麗な眉目を苛立ちに歪ませ、腹だたしげに吐き捨てた。

「ニンゲンのくせに！」

「その言い方は好きになれないね、イザベラ」

第五、第八連隊に宛てがわれた兵舎は隣り合っている。ジークとイザベラの二人は、己の兵舎に帰る道すがら、それぞれの思惑を胸に話し合う。

万夫不当 ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは思わしげに眉を顰めた。

「先の祝賀会の時は普通だったんだ。あの猫が何かしたと思うべきなんだろうね。会議中も、ずっと私の方を見ようとしなかったし……」

「……」
「呆れた！」

イザベラは金髪をかきあげ、苛立ちをそのままに吐き捨てる。

「いくらあの、おかしい猫が関係してるからと言って、この私を無視したのだけは許せないわ！」

「今日は、やけにむきになるね。何かあった……？」

ジークはゆったりと言う。

八頭身の大柄な体躯に、鷹揚な物腰。何もない時は、何もない。平時の万夫不当は、優雅な銀色の鬘を持つ狼の獣人だ。

イザベラは、この幼なじみの義理堅い所を気に入っている。それでなければ、気難しいエルフの彼女が長年友達付き合いをするわけがない。

「むきにもなるわよ、なんたって、あいつは」

そこまで言つて、口ごもる。イザベラが口にしたのは別の話題だ。「それで、あんたの方はどうなのよ。この前の園遊会、うまく行ったの？」

「……まあまあだね。相変わらず、とてもいい匂いがしたよ……」「はあ？」

イザベラは軽い目眩を覚えながら、うふふと口元に手をやるジークを生まれて初めて見る珍妙な生き物のように思った。

「少し、興奮してしまつてね……私も、あまり猫のことは強く言えないかもしれないね」

「……」

呆然とするイザベラを置き去りにして、『万夫不当』は兵舎の影に消えて行った。

恋、というやつだろうか。

経験のないイザベラにはよくわからないが。

あの『万夫不当』をして、おかしくさせる代物であることだけは間違いない。

だが、あの人情無しの救急箱は、誰のことも愛していないのだ。よどみなく言い切った事を、イザベラは知っている。

かわいそうなジーク……相手にもされないで。

そう思うと、この上なく腹が立った。

あのニンゲンは何様のつもりなのだ。一言、言ってやらねば、とてもでないが収まりがつかない。

イザベラは踵を返すと『第七連隊』の兵舎へと向かった。

すれ違ふ騎士たちに、どことなく着崩しただらしない格好の者が増えてくる。傭兵上がり共だ。それらがエルフのイザベラに向けてくる視線は、興味半分、おもしろ半分といったところか。

（ニンゲンが…！）

人間が己に向ける奇異の視線に嫌悪を覚えるのは、これが初めてではない。

イザベラは思ふのだ。

あの暢気者で、馬鹿のレオンハルト・ベツカーは、見世物小屋の出し物を見るような好奇心に満ちた視線でエルフを見たことはなかったぞ、と。

そういえば……レオンハルト・ベツカーといえば、あれだ。

四年前、猫の獣人の娘を連れて、何も聞かずに助けってくれと頭を下げてきたのを思い出す。

あの娘、名前をなんと云っただろう。

エス…エヌ……そう、エルだ。

そんなことに思いを馳せるイザベラの顔からは、いつの間にか陰が消え、僅かな微笑みすら浮かぶのだった。

第12旅団、団長アキラ・キサラギの執務室の扉は、現在、薄く開かれている。

何度、呼びかけても応答のないことに不審と苛立ちを感じたイザ

ベラが、無断で立ち入ったためだ。

そのアキラ・キサラギの執務室で、イザベラは棒立ちになって、己を持て余している。

視線の先では、レオンハルト・ベッカーが眠っている。

青白い表情にびっしりと脂汗を浮かべ、時折苦しそうな呻き声を上げていた。

なんとかせねば、イザベラはそう思う。

だが、何をどうしたらいいのか分からない。汗を拭けばいいのか、起こしてやればいいのか、いや、そもそも自分は何をしに来たのだろう。

そう、文句を言いに来たのだ。

青白い表情で苦しそうにうなされるレオンハルト・ベッカーに。

果たして、それはどんな罪悪だろう。

あの暢気者で馬鹿のレオンハルト・ベッカーが、眠っている間すら苦悩している。

それはどんな苦しみだ？

暢気で馬鹿な男が身を擦る程の悩みとは、どの程度の大きさだ？

イザベラにはわからない。ただ、文句を言うつもりはとうに失せている。そしてひたすら戸惑うのだ。今、何を為すべきかと。

取り出したハンカチを揉み絞りながら、なおもためらうイザベラは胸に激しい動機を感じている。

その視線は『救急箱』と呼んでいる男の顔から離れない。

やがて、レオンハルト・ベッカーが一際苦しそうに吐き出した。

「ごめん……ごめん、ジーク……」

イザベラは、胸の奥に小さな軋みの音を聞く。

その女は、ここにはいない。口にする名前を間違っているのではないか……？

「すまない……イザベラ……」

レオンハルト・ベッカーの頬に一筋の涙が落ちる。

イザベラ・フォン・バックハウスが生まれて初めて見た男の流した『涙』。

そして イザベラの胸は、引き裂かれた。

第19話 猫のワルツ

デスクの上に、四角く丁寧に折り畳まれたハンカチが乗っている。
ハンカチは、ぐっしょりと濡れており、それには、

イザベラ・フォン・バックハウス

と金の刺繍が施されている。

「まずった……」

俺は頭を抱えた。

眠っている間のことだ。何が起ったかは、わからない。この執務室は、第12旅団の　もとい、アキラ・キサragiの秘密の山だ。そのアキラの留守中にイザベラがこの執務室に入り、その時、俺が居眠りしていたなどと知れたら……

「ふっ……死んだな」

黙っておこう。

固く心に誓うのだった。

統帥総本部からは、一日二十通以上の手紙が、俺宛に届く。

この馬鹿げた量の手紙の差出人は、アキラ・キサラギだ。

内容のほとんどは、俺に対する恨みつらみで固められてあった。

どうやら、アキラは統帥総本部の重要な会議でへまをやったらしく、そのことで酷く叱責を受けたようだった。

アキラの手紙の内容によると、その責任のすべては俺にあるらしい。

最初の二、三通は目を通した俺だったが、似たような内容の手紙に飽きてしまった。それ以降、アキラからの手紙はすべて、処理済みの棚にほうり込んで置いた。

そのアキラ・キサラギが明日帰ってくる。

執務室で、近く行われる模擬戦のためにあらゆる状況を想定し、事前に策を練る俺だが、一日中、そればかりをやっているわけではない。

ふと、暇を持て余し、アキラの手紙の中から一番新しいものを選び、封を開けて中身を確認してみる。

「……………」

アキラの手紙には、くしゃくしゃになった字で、

おまえを殺す。

と短く書かれていた。

どこかの誰かが言っていたのを思い出す。

女という生き物は、神が男の曲がった肋骨で創ったものである。こつとも言っていた。

女とは男の曲がった肋骨で創られた。元々、曲がったそれは、捨て置けばなお曲がる。

「やれやれ……………」

まさか本当に殺されはしないだろうが、気の重い話だ。

翌日の早朝、単騎、馬を飛ばして兵舎の外れまでアキラの出迎えに向かう。

これはまあ、ご機嫌伺いのようなものだ。拗ねくれたままにしておけば、執務に滞りが出るのは目に見えている。

アキラ・キサラギは、優秀な軍人であるが、その彼女をして個人の欠点とは無縁でいられないものであるらしい。

俺に対する異常な執着。

アキラの気持ちを愛情と呼んでいいものだろうか。

「副長、ふくちょー！」

向かいから、情けない声が飛んでくる。

俺と同じように、単騎、馬を飛ばす若い騎士。銀の拍車の付いたブーツは、彼がまだ見習いの従騎士であることの証だ。ステイクス

通常、正騎士は金の拍車の付いたブーツに、マントの留め金にはやはり、金を使う。

涙さえ浮かべた若い従騎士からは、悪い予感しか感じない。一瞬、後背に視線をやり、逃げ出すかどうか思案するが、そういうわけにもいかない。

やむを得ず、馬を止め、事情を聞く。

「どうした？ そんなに慌てて。内乱でも起こったか？」

「に、逃げて下さい！ 団長が、団長がー！」

任せる！ 遠くに行けばいいんだろ！？

俺はその言葉を飲み込む。

空は晴れている。だが、血の雨が降りそうだった。

ニーダーサクソンの下町を見下ろす小高い丘で、アキラ・キサラギを乗せた馬車は立ち往生しており、駆けつけた俺を見て騎士の何名かが頻りに手を振って、

「来るんじゃない！」

とか、

「殺されるぞ！」

とか剣呑な叫びを上げている。

その仰々しさに異変を感じたのだろう。馬車から既に抜刀したアキラがおつとり刀で飛び出して来た。

「きいさあまあ！ よくも！ よくも！」

ぐしゃぐしゃに泣き濡れており、もはや人目を憚る余裕もないようだった。

やれやれ。

アキラ・キサラギという女性は、小柄で短気だが、これでも何者かではあるのだ。副長である俺はそれを知っている。だからこそ、俺は選んだのだ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーでなく、アキラ・キサラギを。

若くして、最早、『何者』かであるアキラ・キサラギを。

「そこに直れ！ ボクがこの手で殺してやる！」

「はいはい、アキラ。お帰りなさい」

「くそお！ 馬鹿にしているな！？」

さんざん喚き、抵抗するアキラを捕まえる。取り巻きの騎士数名が見ているが、かまいやしない。すかさず抱き上げて、

「なにを」

キスしてやった。

驚くには値しない。ささやかながら、これはこの前のお返しだ。

「おお！」

ついに現場を押さえたり、と嬉しそうに驚嘆の声を上げるのは、傭兵上がりの馬鹿共だろう。

唇を離すと、アキラは大きく鼻を吸った。その手から、がしやりと力なく刀が落ちる。

「卑怯者……このうすらとんかちの唐変木め……」

「はい、仰せのとおりです」

人というものは、色々なことに慣れる生き物であるようだ。

この身に背負う裏切りや苦悩にも慣れ、いつか自由になれる日が来るのだろうか。

レオンハルト・ベッカー、そのときお前は、何者になるのだ？

今は、このおかしな猫のワルツに合わせて踊る。それだけだ。

第19話 猫のワルツ（後書き）

感想お待ちしています。

第20話 決意

「それで、会議はどうでした？」
「うるさい。少し黙ってろ……」

第12旅団の執務室では、アキラが俺の膝に座り、未だおかんむりの様子で口を噤んでいる。

現場を見た馬鹿共には勿論、固く口止めしておいた。

「なんにも見てませんぜ、副長！」

その口元は下世話に歪んでいた。部隊内で周知の事実になることは間違いないだろう。

「……わかってるのか、おまえは。そのうち、ほんとに殺すぞ……？」

アキラは居心地が悪いのか、ぐりぐりと腰を揺する。

「はいはい、わかってます、わかってます」

「……相変わらず軽いやつだ……って、おまえ！」

「小官も男ですから」

膝の上で腰を振られては、反応してしまう。悲しい男の性というやつだ。

「待て！ 待て！ おまえはよくても、ボクの準備はできてない！」
「ええ、いくらでも待ちますとも」

慌てるアキラの表情を窺うことはできないが、耳まで赤かった。

……おぼこだな、こりゃ。

こうなれば、猫將軍も可愛いものだ。からかってやろうかとも思うが、話が進まないのを止めておく。

アキラは、ぱつと飛びのいて、いつものタクトを取り出すとそれでブーツをぴしゃりと叩く。

「ぼ、ボクのことより、まずおまえだ。おまえのことを聞かせる。留守中、アスペルマイヤーとバツクハウスに動きはなかったか？」

一瞬、バツクハウスの、あのハンカチが脳裏を過る。

だが、口に出してはこう言った。

「アスペルマイヤーからは何度か食事の誘いがありましたが、バツクハウスの方は何も」

「食事!？」

アキラの眉が、ぎゅつとよる。

「断ったんだろうな!？」

「はい」

「ならいいんだ……」

そこで、またもやブーツをぴしゃり。手を後ろ手に、お尻を振って歩きます。

「それで門閥貴族の方は、何か動きがあるか？」

「いえ、何も。先のアスペルマイヤーの行動と、門閥貴族は無縁のようですね。秘密裏に連絡を取っている様子もないです。ただ……」

……

「ただ、なんだ？　言ってみろ」

俺は一つ頷く。ここからは真面目な話だ。

「今はまだ、と思うべきでしょう。あなたが力を付ければ、向こうの方でも反応せざるを得ません。今の内に準備を進めないと」

「うん……うん……」

アキラは執務室の中央で、タクトを片手に思い悩むふうだった。「信用できる子飼いの部下を増やしましょう。内偵するにしても、身を守るにしても今のままではあまりに無勢ですし……」

「そつだな。その必要性はボクも考えていた……」

アキラはなぜか齒切れが悪い。珍しいことに、決断を迷っている

ようだった。

「なにか懸念が？」

「うん……それは……逆に、裏切り者を抱えることになりはしないだろうか……」

「その懸念は向こうにもあります。力の差でいえば、向こうに圧倒されています。多少の不利はやむを得ないかと」

一際大きくアキラは、ブーツを引っぱたく。きりりと表情が引き締まり、前を向いている。

「そうだな。おまえの言うとおりだ。早速、準備にかかれ」

「はい、実はもう人選を済ませてあります。段取りはこちらでいたしますので、一度直接会ってください。最終的な判断はお任せします」

アスペルマイヤーを切って捨てた時に、悩みも切って捨てた。

俺はアキラ・キサragiに自らの運命を託す。俺の死も栄光も、彼女と共にある。力の出し惜しみはしない。全力で事に当たるのは当然のことだ。

戦場ではミスした者でなく、迷ったやつから死んで行く。遅れたやつから死んで行くのだ。俺は元傭兵だ。難しい判断は何度もあった。これでも思い切りはいいほうだ。

そして、俺はまだ生き残っている。

アキラは、ぴしゃっぴしゃっ二度ブーツを引っぱたいた。

「その癖、止めたほうがいいですよ？」

アキラのブーツは、いつも右から駄目になる。いくら軍からの支給品とはいえ、少しもったいない。

「おまえ、使えるようになったな？ 何かあったのか？」

「……」

いまさら何を言う。俺を仕込んだのは、ほかならぬアキラではないか。副長として、いつでも細かいことに気を配れ、常に先を考え

ると言ったのは自分ではないか。

それが『支える』ということだと、何度言ったと思っているのだ。

「ふん……ボクのほうでも、ご褒美を考えなくちゃいけないな……」
その言葉からは、よくないものしか感じない。

「アスペルマイヤーの件は？」

「万全です。百度やつても、負けません」

「よし」

そしてアキラは、またお尻を振り振り、室内を練り歩く。上機嫌で言った。

「楽しみだな！」

アスペルマイヤーとの決戦が近づいている。

第20話 決意（後書き）

アキラは、ホント、我儘だし腹黒いし暴力的だしどうしようもないですね。

このヒロインに対する意見とかあればぜひ！

第21話 武人として

大隊長以上の指揮官の会合で、模擬戦での予定がアキラの口から発表された。

「明日の訓練は、第七連隊と第五連隊の模擬戦を実戦形式で行う。なお、第七連隊の指揮を執るのは副長だ。何か質問は？」
「団長はどうするの？」

『第五連隊』の指揮官、アスペルマイヤーの発言は拳手と同時だった。

「ボクはその様子を見学させてもらう。部隊の実力を測りたい。この模擬戦の結果を踏まえ、第12旅団の新しい編成内容を考えさせてもらう」

「つまらない……逃げるの？」

その言葉に、一瞬アキラは目を剥いたが、口元に凄惨な笑みを浮かべ、こう切り返した。

「たいした口を利くじゃないか、アスペルマイヤー。いいだろう。おまえがレオに勝るようなら、このボクが直々に相手してやるんじゃないか」

「いいよ、それでも」

会議終了後、俺のマントを捕まえ、アスペルマイヤーはこう言った。

「ごめんね、レオ。手加減するから、前に出て来ちゃいけない。わかったね？」

「はい。お手柔らかにお願いします」

口元に広がる笑みを実感する。

俺は武人として、アスペルマイヤーになめられたのだ。

どこまでも冷えたその思いは、恐ろしいほどに俺の戦闘意欲をかき立てた。

実戦形式の模擬戦は、兵舎の外れにある練兵場で行う。訓練ではあるが、その内容は実戦形式で行われる。

元傭兵のこの俺が一軍を率い、あの『万夫不当』と相對するのだ。戦争屋とは業の深いものだ。俺の胸にあるのは、僅かな逡巡と大きな昂揚。

相手にとって、不足なし。

そして 戦闘の火ぶたは、ついに切って落とされた。

アキラには、俺という副長がいる。しかし、俺には『俺』がない。

そのため、俺は大隊長の中から一人を選び、副長として機能させた。

「副長！ やつこさん、綺麗な陣を敷いてますねえ」

アスペルマイヤーは練兵場のほぼ中央に全兵力を集中させ、『フ
ランクス』の陣を敷いている。圧倒的な突撃力を誇るこの陣は、
正面決戦では無類の強さを発揮する。

「どーしやすか、副長」

「ふむ…」

なるほど、確かにアスペルマイヤーは綺麗な陣を敷いている。
陣というものは、外観を美しくすれば実用的でなく、実用的にす
れば美しくない。

アスペルマイヤーは最高の戦士であるかもしれない。だが、指揮
官としては二流だ。

「斜線陣を敷いて対抗しろ。わかってると思ってるが……」

「へえ、ヤローは無視するんでしょ？ 副長も心配症ですねえ」

さて、この圧倒的突撃力を誇る『フランクス』の陣形であるが、
側面の攻撃に弱いという特質を持つ。

『フランクス』の火力は前方に対して発揮されるものであり、
それを受け流す斜線陣との相性はよくない。

そして、ついに激突する『フランクス』と『斜線陣』。

『第七連隊』はアスペルマイヤー率いる『第五連隊』に側面から
張り付くようにして戦線を構築した。

戦鬨の推移は俺の予想通りに展開する。

第七連隊に防御力を削られた第五連隊は、ややもして縦長の戦列
を見せはじめた。アスペルマイヤーを先頭とした本隊を孤立させる
形で、だ。

「頃合いよし」

俺が直々に手ほどきした一個中隊を新たに戦線に投入する。

「副長は行かねえんで？」

「戦場であれに遭ったら、すつとんで逃げるね」

「ちげえねえ！」

傭兵上がりの大隊長は勝利を確信したのだろう。大きく声を上げて笑った。

アスペルマイヤーは最高の戦士だ。だがこの場合、それがよくない。傑出した彼女の突進力について来られる者などいない。

一戦場を駆ける一戦士が、戦況全体を操る指揮官に勝てるはずがないのだ。惜しむらくは、アスペルマイヤーはそのことを知らずに、これまでの戦闘を戦い抜いて来たことだ。

「アルフリード側にも、優秀な指揮官は少ない、か……」

やや離れた場所で、戦況を俯瞰する俺の目に入ったのは、孤立しがちだったアスペルマイヤーの本隊が、新たに投入された一個中隊におびき寄せられるようにして、さらに突出する光景だった。

「そろそろですね」

「ああ、そろそろだ」

『第七連隊』全体にアスペルマイヤーは、無視しろと命令してある。相手にされない『万夫不当』はいきり立ち、目の前の一個中隊を追い回した。

そして アスペルマイヤーは、消えた。

「ぶはっ！ はまりやしたぜ！ あのヤロー」

大隊長が吹き出すのと同時に、わっ、と鬨の聲が上がる。

「終わったな……」

戦端が開かれて、まだそれほどの時間は経ってない。だが、決着を知らせるラッパの合図に、第五、第七連隊は鉾を収め、後退して行く。

俺は本隊として自ら率いた一個中隊とともに、騎士たちの集う喧噪に降り立つ。

第五連隊の騎士たちは、一様に、きょんとした表情で、

「え、もう終わったのか？」

「俺たち、負けたのか？」

「うそだろ、おい」

とざわめき立っている。皆、不完全燃焼の顔付きをしている。あの『万夫不当』を戴く騎士たちだ。最強の誉れ高かるう。今日までは。

練兵場の一角では、大きく空いた落とし穴に、やはり、きょんとしたアスペルマイヤーの姿があった。

その顔には、驚愕しかなかった。己の置かれた状況を理解できないのだろう。

アスペルマイヤーは、数人の取り巻きの騎士と共に、深い落とし穴の中で頭上に掛かった鉄の網を見上げている。

「レオ……これは……？」

「捕まっただですよ、あなたは」

鉄の金網越しに呼びかける。

「おつかれさまでした、大佐。訓練は明日もあります、今日はこれくらいにしましょう」

「……………」

まだ昼飯時にもなっていない。

くしゃり、とアスペルマイヤーの顔が歪む。

「あ、あああああああああああああああああああ！」

落とし穴の中で、砂埃に塗れた『万夫不当』は絶叫した。最強の戦士と謳われたその誇りも、きつと泥と埃に塗れたのだろう。

「卑怯者、卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者！なぜ、私に正面切って立ち向かわない！」

俺はその叫びを無視した。

戦場で負け犬の遠吠えほど、無意味で惨めなものはない。それを知らぬ彼女でもあるまいに。

狼の本性そのままに、落とし穴の中で吠え続けるアスペルマイヤーは、惨めなだけでなく滑稽ですらあった。

だが、まだ続くのだ。

アスペルマイヤーの屈辱と絶望は。

二日目。

怒りに燃えるアスペルマイヤーが用いたのは、またしても『フランクス』の陣形だった。

その意気やよし。素直にそう思う。一敗地に塗れたとはいえ、アスペルマイヤーの『万夫不当』が地に落ちたわけではない。

ただ、それは正しくないだけだ。

「あちゃあ…… やつちまってるねえ……」

俺の隣で控える大隊長が、可哀想なものを見るかのように顔を覆った。

「おい、二日目も予定通りに行くぞ」

「へえ」

この日、俺が用いたのは、アスペルマイヤーと同じ『フランクス』の陣形だ。

おそらく、アスペルマイヤーは内心で会心の笑みを浮かべているだろう。

同数、同陣形のぶつかりあいだ。小細工の入り込む余地はないと思っただろう。

ただ、それが間違いだ。

アキラ・キサラギが未だ、大佐であった時分、『第七連隊』での模擬戦は、常に本気で行われた。刃を潰し、布を巻いた模擬刀だが、全力で突き、叩けば骨折させ得るし、下手すれば殺しもする。

アキラ・キサラギ曰く、練習で死ぬような弱卒はいらない。

痛みというものは中途半端に与えれば、相手の怒りを誘発するが、ある一定の値を超えれば恐怖を抱かせるものであるらしい。

アスペルマイヤーは気づいていない。『第五連隊』に根付こうと

している『恐怖』に。本気で打ち、本気で突き、本気で掛かってくる相手の恐怖は、強者である『万夫不当』には理解できない。

この時点で、俺とアスペルマイヤーの戦力比は既に五分でない。もとより、指揮官としての能力は五分ではない。

この日も『万夫不当』は相手にしない。

前線は、アスペルマイヤーがまたしても突出する形となった。凹形に展開する『第七連隊』に取り込まれるという最悪な形だ。

勇猛果敢に前進するアスペルマイヤーは、気づいた時、退却する術を失い、行き着く先で見つけた俺に遮二無二突撃して、

またしても、消える。

すべては予定通りだった。呆気ないほどに。

そして この日も、昼飯前に決着のラッパが鳴る。

「こりゃ、つまんねえや」

第七連隊の騎士たちが吐き捨てる。

アスペルマイヤーはこの日も落とし穴の中。ぼんやりと、俺を見上げる。

「大佐、おつかれさまでした。また明日やりましょう」

「……」

くしゃりと歪んだアスペルマイヤーの顔は、泣き笑いの表情だった。

胸が痛んだ。その表情は、『万夫不当』がしてよい表情ではない。

哀れを誘う表情は、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが
してよい表情ではない。

アキラの小躍りする姿が浮かぶ。

そして、ここからアスペルマイヤーにとっての地獄のはじまり
だ。

第22話 歪む心（前書き）

ジーク視点です。猫、大量投下を開始します。

第22話 歪む心

七日目。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、第五連隊のほぼ中央にある本陣で、ひっきりになしに飛び込んでくる急報を聞いている。

模擬戦、三日目以降、指揮官として本隊に留まった結果がこれだ。

「第一大隊、押されています！」

「第四中隊、降伏しました！」

「第二中隊、降伏しました！」

「第二大隊、連絡が取れません！」

その急報に、ジークは右往左往を繰り返す。彼女が駆けつけたところで、敵は逃げて行くばかりなのだ。

慌てて突っ込めば、また落とし穴に嵌まってしまふ。

今はもう、練兵場のそこかしこに落とし穴が掘られているような気がして、ジークは歩くのにすら気を使うありさまだ。

二日連続で穴に嵌まって、捕縛の憂き目を見た大将分を見る騎士たちの目は冷たい。

「大佐。また明日……」

レオのあの言葉を、もう何度聞いた？

ああ、でもまた負けたら、レオに会えるかも。

「隊長！ 至急救援を！」

第五大隊の騎士たちの目が白い。口に出しこそしないが、目が言っている。

『おまえは、なにをしているんだ？』

『役立たずの狼め』

敵ではなく、味方からのその重圧がジークの『万夫不当』を押し潰しつつある。

そして レオンハルト・ベッカーに負けるとは、どういうことがジークは理解する。

小鳥と愛でたあの青年は、どうやら鷹か鷲のような猛禽類の類いであつたらしい。それに敵わぬ己は、アキラ・キサラギの足元にも及ばぬ。

世界が揺れる。

弱者が強者に付き従うのは、世界の理だ。そう教えられて生きて来た。それしか知らず、生きて来た。

圧倒的な強者としての生のみを許されて来たジークは、徹底的な敗北の衝撃に押し潰されつつある。

「わ、わたしは、いっしょうけんめいやっている」

ジークの口から溢れ出した言葉は子供のように拙く、か細かった。

「だ、だから、そんなへんなめで、みないでほしいんだ」

そして、最後の報が飛び込んで来る。

「隊長……包囲されて、ます……」

「うん」

もうどうしていいか分からない。ジークはひたすら頷いた。
この七日間で、ジークは六度の敗戦と六度の捕縛と六度の、

「大佐、また明日……」

を耳にしている。

自身が『小鳥』と呼んだ男の手によって、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの『最強』の自負心は潰え去ろうとしている。
己が最強であることを疑うことはなかった。だがそれはもう、過去の思い出になりつつある。

周囲の騎士たちも同様であるようだ。力なく、言った。

「降伏を、勧告されてます……」

「うん」

ジークは頷いた。

「これは、れんしゅうだから、まけたっていいんだよ」

第23話 悲劇（前書き）

ジークのファンの方にはきつい展開です。

第23話 悲劇

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの敗因は、彼女が本物の『万夫不当』ではなかったことだ。

勇将には勇将の、知将には知将の戦い方がある。たとえ、敗戦の恥辱に塗れようと、勇将は勇将であればそれであったのだ。

七日間の実戦訓練を終え、数人の騎士を伴い、ジークの天幕に向かう。

古典に有った故事に倣い『七度捕らえ、七度放つ』。俺がアキラにした献策の正体はそれだ。これによって狼の牙を折り砕く。

ジークに八度目はあるだろうか。

『不撓不屈』の強さを、『万夫不当』は持ち合わせているだろうか？

訓練三日目からは、一方的な展開だった。

前線に出ない『万夫不当』に意味はない。『第五連隊』の騎士たちにとって、ジークは弱みでしかなかったろう。指揮官として未熟なジークは、重荷でしかなかったろう。

『第五連隊』の騎士たちは、皆、満身創痍で疲れ切った表情を浮かべている。右往左往するばかりで、解決策を持たぬ指揮官に引きずり回された結果がこれだ。

「あ、あの副長、まだ訓練は続くんですか……？」
「敬礼せんかあっ！」

怒鳴ったのは、俺の取り巻きの騎士たちだ。

特に命令したわけではない。彼らの方で、『第五連隊』の騎士たちを、己と五分の立場だとは思わなくなったただけだ。

アキラ・キサラギの下に、弱卒はいない。

『第五連隊』の方でも、俺たちは恐持てに見えていることだろう。

「おまえら、いじめるな」

意地悪でなく、真面目に窺める俺の声に、騎士たちが大声で笑い出す。

戦士であることも出来ず、指揮官であることも許されなかったジークは、どうなっただろう。

そのジークは、己が設営した『第五連隊』の天幕のどこにも姿が見えなかった。

「おい、アスペルマイヤー大佐はどこだ？」

「さ、さあ？」

その問いかけに、傷ついた騎士たちは首を傾げる。

「おまえらの大将だろう。知らんとは何事だ」
唇を噛む。

自身の策とはいえ、これは少し効き過ぎだ。部隊全体にジークを軽視する空気が出来上がってしまったている。

この練兵場では、様々な訓練が行われる。
急勾配を利用して物資の運搬訓練を行う急坂路の向こうで、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは見つかった。

斜面に隠れるようにして蹲り、膝を抱えて座り込んでいる。

「ジーク……？」

「あつ、レオ！」

俺の呼びかけに応じ、ぱあつ、とジークの顔に無邪気な笑みが広がる。

「どうしんですか、こんなところで……」

目頭が熱い。

俺がやったのだ。

「うん、ジーク、いっぱいはいまけちゃったから、せめてかくれんぼでかとうとおもって……」

ジークは照れ臭そうに、鼻の頭を擦る。

俺の知っている『戦場の女神』は、もういない。

「そうですか……すいません……俺、見つけるの遅れちゃって……」

なんともろい。

なんとあつけない。

狼のプライドは、きつとこの敗北の大きさを受け止め切れなかったのだろう。

「それじゃあ、ジークのかちでいいかなあ」

「いいですとも」

熱い涙が、次から次に湧いて来る。

その涙を、ジークがぺろりと舌で嘗め取る。

「レオは、やっぱりかわいいね。ジーク、こんどはもつとてかげんしてあげるから」

「はい」

「レオ、すきだよ」

「はい」

このようにして、俺は、七日間の模擬戦を終えた。

失ったものは大きく、得るものは何もない戦いだった。

第24話　そして

アキラ・キサラギは模擬戦の結果に大層満足で、二足のブーツを取り替える嵌めになった。

「レオ！　レオ！　よくやった！」

「……」

俺は嬉しくも何ともなかった。

一方のアキラは、手にしたタクトで狂ったようにブーツを叩き、執務室で一頻り笑いに噎せた。

「見たか！？　アスペルマイヤーのあのつらを！」

「………はい」

著しく精神が退行したジークは、俺のマントを掴んで離さず、子供のようにだだをこね、離れようとしなかった。

その様子は、アキラの嗜虐心を大いに満足させたようだった。

「あいつは、もう終わりだな！」

「………はい」

これは予想を超えた、最悪のケースだ。

戦闘に関する限りプライドの高いジークが、模擬戦での徹底的、なおかつ屈辱的な敗北を許せず、今後の軍務に大きく差し支えを残すのではないか、という懸念は確かにあった。

だが、まさか精神を病んでしまうほどとは思わなかった。

「さあ……さあ！　レオ！　ご褒美は何がいい！？」

有頂天で浮かれるアキラだが、ことはそんなに単純ではない。

「なんでもいいぞ！？」

「はあ……」

俺はため息を吐く。それがまるで宿命でもあるかのように。

アキラは鼻息を荒くして興奮していたが、しばらくして何か思いついたように、

「そうだ！　ボクを孕ませるか！？」

「ぶばっ……ごほっ！ ごほっ！」

一足飛びに予想を超えた発言に、俺は激しくむせ返った。

「な、なんでそうなるんです？」

「気にするな！ いいんだよ！ おまえはそれだけの結果を出したんだ！」

駄目だ。アキラの目が、いつかのように怪しくなってる。

先日、この状態のアキラを放置して、大変な目に遭ったのを思い出す。エドガーのような気の毒な犠牲者を出すわけにはいかない。

「アキラ、落ち着いて下さい。一度、座りましょう」

「椅子をするの？ いいよ！ ボクはもう、準備ができてるからね！」

やばい。口調が変わり始めた。これは……とんでもないことをやらかす前兆だ。

椅子の上で、馬乗りになったアキラの背を摩りながら、腰のカタナを外し、机の向こうに押しやる。……なんとかに刃物は、とても危険だ。

「ボクが脱ぐ？ それとも脱がせる？」

「……」

もう、嫌とは言えんのだろうな、きつと。

不意に、思う。

もし、ジークを潰したのが、アキラだったらどうなったんだろうかと。

きつと、ジークは練兵場の露と消えていただろう。アキラならそ

れをやる。理由は練習中の事故とでも、なんとも言える。そう思ったからこそ、俺は進んでジークと戦ったのだ。

「アキラ、落ち着きましょう。俺は逃げませんから」

「ん？ あ、うん。そう？ そうだね。がつつくのは、みっともないよね」

頬を上気させたアキラの腹をさすってやる。

「んん……なんか、それおちつく……」

アキラは、俺を愛しているのだろうか。

すくなくとも俺は、この狂暴な求愛には辟易していて、彼女を愛そうなどとは思えない。

アキラは、ジークと戦わなかったのではない。戦えなかったのだ。ジークを殺せば、俺は決してアキラを許しはしない。だからこそ、アキラは己の手による決着を避けた。今なら、それがよく分かる。

もったいないことだ……。

おそらく、アキラ・キサラギという人物は時代の寵児であり、風雲児の一人なのだ。俺より若くして幾多の戦場をぐり抜け、下級貴族の出身でありながら、将官の地位に着いたことが、それを証明している。

それが俺のような、凡庸の範囲から出ることのない男に思いを寄せるなど。

「アキラ、しばらくこうさせてください」

「……え？ あ、うん」

アキラを抱き締める。

俺は、この余りにも狂暴なアキラの思いを、大事に取り扱わねば

ならない。この時代の風雲児が、俺ごときのために道を誤らぬように。

いつか、俺という名の軛くびきから逃れ、自由に羽ばたくその日まで。

「まるで、夢のようです……」

「……！ お、おまえ……」

これは夢だ。

アキラ・キサラギという時代の風雲児が、俺に見せるうたかたの夢だ。

平民出の俺が士官の身分にあることも。

あの万夫不当を撃破し得たことも。

俺は、彼女に付いて行けるほど優れた男ではない。いつか、武運拙くして消え去るだろう。自分のことだ。確信に近い思いがある。

だが、その日までは彼女の傍らにあり、共に夢を見ていたい。

どこまで行くのか。そんなことは聞かない。

つまらぬ男の俺は、どこまでも連れて行かれるだけだ。

「こんな気持ちだ、あつたんだな……」

ぶつぶつと、アキラは夢見心地で呟く。

「ボクを抱いていると、夢のようか……」

はーっと、アキラは悩ましげな息を吐き出す。

「すごい……すごいぞ。今のボクは、充実している。今なら、なんだってやれる。なんだってできる気がするぞ……！」

そこで俺は、一つ大きく手を打つ。

「それもいいでしょう。ですが、今は目の前のことに集中しましょう」

「……そうだな。勢いで関係を持つのはやめよう。うん、この気持ち、もっと素晴らしいものだ。それに気づけた。今は、それでよししよう」

お、おお……あのアキラが理性的だ。落ちてるものでも食べたのだろうか。

そこでアキラの眉間に皺がよった。

「おまえ、いま、とても失礼なことを考えているんじゃないか？」

「いえ、そんなことは……」

一つ咳払いして、続ける。

「アスペルマイヤーの後任をどうなさいますか？」

アキラは意外そうに答える。

「いや、あれはあのまま使うぞ？」

「え？　しかし、アスペルマイヤーは……」

「壊れてるな。それがいいんじゃないか」

意味がわからない。胸に、どろりと粘着質の液体を流し込まれた感じがした。

「い、今のアスペルマイヤーが職責を全うできるとは思えませんが

……」

「だから、それがいいんじゃないか」

「……」

「どうした？」

わからない。アキラが何を考えているのか。

「……アスペルマイヤーを黽めるのは、おやめください……」

アキラは鼻を鳴らした。

「ボクに動物虐待の趣味はない。とにかく、これは決定事項だ」

「……」

「副長！」

怒鳴られ、身が竦む。

「副長！ 返事をしないか！」

そうであることを迫るかのように、俺を怒鳴ったのは、アキラ・キサラギ。

時代の風雲児だ。

第25話 覚醒

イザベラ・フォン・バックハウス率いる『第八連隊』との間に予定されていた模擬戦は中止となった。

『第八連隊』とやり合っても勝つ見込みは十分あったし、その仕込みは既に終えていた俺だが、それでもイザベラの反応は以外としか言いようがなかった。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー……『万夫不当』を完膚なきまで叩き伏せた俺だが、なによりもイザベラが怖かった。

戦友であり、竹馬の友でもあるジークを心を壊す程までに追い詰めた俺を、イザベラは決して許しはしまい。その思惑からだ。

しかし、その反面で俺はイザベラに罰してもらいたかった。

恩知らず、恥知らずの裏切り者と、切り捨ててもらいたかった。そうしてもらえれば、この胸に押し寄せる良心の呵責からも、いくらかは解放されたものを。

だが、イザベラはそうせず、壊れたジークを見たときも、少し驚きはしたものの、取り乱した様子はなく、静かにこの後予定されていた模擬戦を断った。

ジークを見たイザベラは、憤慨するか警戒するかのどちらかであろう。そのどちらにしても、敵対は避けられまいと踏んでいた俺は、いささか肩透かしを食らう結果となった。

不気味。

アキラはそう評した。俺も同様に感じた。

『性悪女』バックハウスが何を考えるか、『知恵者』バックハウスが何を企むのか。

執務室に置き去りにされた、あのハンカチが今も脳裏から離れない。

イザベラはその後の部隊編制にも反対する様子を見せず、己の子飼いである『第八連隊』の大幅な人員入れ替えに同意した。

『第五連隊』の騎士たちは、己らの指揮官である『万夫不当』を徹底的に叩き潰した俺を恐れるようになった。

俺という鞭。それに対し、飴を与えたのはアキラだ。模擬戦終了後、疲れ切った『第五連隊』の騎士たちに特別休暇という名の愛想を振り撒いた。

自然、人望と好意はアキラの元に集まる。嫌悪と恐怖は俺の担当だ。自ら立てた策とはいえ、いささか気の滅入る話だ。

そんな俺に、『猫の懐刀』という迫力に欠ける二つ名を贈ったのは『第七連隊』の馬鹿共だ。ありがたくもなともない。

大きな違和感を感じるものの、『第五連隊』と『第八連隊』の取り込みは順調に進んでいる。

夜。

静かに自室で思索に耽る俺の元へ、エルが一日の終わりを告げにやって来る。

「少佐、そろそろ、おやすみくださいませ」

静かに頷く俺の背中に、エルが、そっと、もたれかかる。

「模擬戦で、あの『万夫不当』に打ち勝たれたそうで……」
「……」

そのときが来たのだろうか。だとすれば、ありがたい。
壊れたジークの、天使のような微笑みは、どこまでも俺を苛み、
苦しめる。

エルが抱き着いて来る。

「レオンハルトさまの、ただ一つは、エルのもんです」

「……」

「レオンハルトさま、もっと、輝いてくださいませ。エルのために」

「……」

「そのときは、きっと……」

そして、一日が終わる。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、以前と同じように
『第五連隊』の隊長として第12旅団に留まっている。

表向きこそ隊長だが、現在の彼女の執務室は託児所同然の扱いを
受けており、出入りするのは数人のメイドだけだ。実質の執務はア
キラと俺が執り行っている。

自然な流れで『第五連隊』の騎士たちはアキラに依存するように

なっで行った。

著しく精神を退行させたことにより、判断能力のほとんどを失ったジークが、なぜ軍に留まることになったのか。

それは、本人の強い希望と彼女の父親であるアスペルマイヤー伯爵の利害が一致したためだ。

全てを失った現在においても、俺と共に在りたいと願うジークと人間である俺に完膚なきまでに敗れ、自己を崩壊させた娘を忌避するアスペルマイヤー伯爵。

アキラが、そのジークを使うと言った。それが全てだ。

旅団内で定期的に行われる佐官級の会議は、副長の俺と大佐であるイザベラが中心となっ て執り行うことが多くな った。

この日の会議内容は、実際に旅団による『統治』が行われた際の部隊編制についてだった。

そこで、事件は起こることになる。

「その際は、旅団 三個連隊を九個大隊に分け、一個大隊を管理、行政用の一単位とする。そこまではいいわ。それで……指揮官には、どの程度の権限を与えるのかしら？」

ジークの崩壊以後、イザベラの態度に変化はない。会議中の発言も至極真つ当なものだった。足を引っ張るか無視のどちらかだろうと思っ ていた俺は、ペースを狂わせられっぱなしだ。

「そうですね……小官は政治家でないので、何もいえませんが……」
「あんだ、それで戦時中の旅団の副長が勤まると思っ てんの？」

俺を責めるイザベラは、なぜか上機嫌だ。

「す、すいません。勉強しておきます……」

「しょうがないわねえ……私が考えるに」

「ここはつまらない。レオ、そとにいこう」

にこにこ笑顔で発言していたイザベラを遮ったのは、ジークだ。模擬戦以降もアキラが権限を取り上げなかったため、現在も会議に出席している。そのジークだが、会議中はいつも俺の隣に腰掛ける。

「どうしました、ジーク？」

鷹揚に答える。これは俺の罪の証しだ。逃げるようなことはしない。

イザベラは押し黙り、表情を消して静かにこちらを見つめている。会議中のジークは強いストレスを感じるようで、よく爪を噛む。噛みながら言った。

「たびにでよう、レオ。ジークがゆうしゃ、レオがおひめさまをसरるんだ」

息が詰まった。これは俺がやったのだ。俺の責任なのだ。この余りに痛々しい発言と光景に、皆一様に目を背ける。

「は、はい、ジークは勇ましいですね。お供いたし」

涙が溢れる。アキラはこれがやりたかったのか？

わからない。

わからないが、俺には耐えられない。

「レオは、なきむしだね。でも、かわいいよ」

「すいません、すいません、ジーク……」

嗚咽が止まない俺の涙を、ジークがなめ上げる。

「レオ、すきだよ」

「はい」

その次の瞬間 会議室内に、激しい炸裂音が響き渡った。

ジークを除いたほぼ全員が、何事かとそちらを見やる。

イザベラ・フォン・バックハウスだ。

右手に持ったタクトを、会議用の円卓に叩きつけたままの姿勢で、俯いている。

「……バカ犬」

俺は耳を疑った。今、イザベラは何と言ったのだ？

「……なんで、あんたみたいな、バカが、ここにいるのよ？」

室内は水を打ったように静かだった。その中で、一人イザベラだけが、押し出すようにして言葉を吐き出す。

「もう友達でもなんでもないわ……」

「……？」

ジークは首を傾げる。自分に言われていることが理解できないらしく、不安そうな面持ちで、俺の袖を引っ張る。

イザベラが、ずっと顔を上げた。

「あんたみたいなバカ、死んだらいいのに」

そう呟いたイザベラは、相変わらず大理石の彫像のように美しかったが、その深く青い瞳には、何の感情も浮かんでいなかった。ジークを、ただ、その存在だけを許された路傍の石のように見つめている。

俺はアキラ以外で、こんなに恐ろしい表情をする女は見たことがない。

アキラが炎だとすれば、イザベラは氷だ。

そのイザベラの放つ刺さるような『無関心』が、冷氣のように室内に立ち込めている。

ごくろ、と息を飲む。

世界は全ての生命活動を停止したかのように静かだ。その停まった世界の中で、士官の何人かの視線がある一点に集まり、はっとしたように逸らされる。

俺の隣。ジークだ。

「……………」

ジークは口元だけに薄い笑みを浮かべている。

壊れている。アキラはそう表現した。だが、なにか違うような気がした。羽化する前の蝶が、蛹として準備期間を必要とするように……ジークも一時の待機時間を必要としているだけではないのだろうか。

ジークは、ゆっくりと瞬きして、イザベラを見つめ直したその瞳の色が、

一瞬　鮮血の紅に見えた。

ひどい胸騒ぎがした。世界は依然として、イザベラの冷氣が固めたままだ。それを鮮血の紅が覆う時、何かが終わる。そんな気がして

「や、やめてください」

言えた。俺は、ほっと息を吐く。

「ジークを怒らないでください。俺が全部、悪いんです。ジークは悪くない」

なぜか、ふっ、と場の緊張が薄れる。

「馬鹿じゃないの、あんたも」

イザベラの口調には強い苛立ちが滲んでいる。

だがその表情は深く青い瞳を大きく揺らし、とても傷ついたように唇を震わせている。

「しらけたわ」

そう吐き捨て、イザベラは、早足で会議室から飛び出して行った。

会議に出席していた一人の士官が、ぽつり、と呟く。

「副長……少し、女性関係を整理された方がよいのではないでしょうか……？」

なんのことだ？ 自慢じゃないが、この数年は身奇麗にしていたつもりだ。

「わるいまじよは、ジークがたいじするよ」

ジークは笑顔すら浮かべ無邪気に言うが、そこからは不吉なものしか感じない。

不吉はアキラだけで十分間に合っている。

ジークを第五連隊の士官たちに任せ、俺も会議室を後にする。

向かうは『第八連隊』の兵舎。

イザベラ・フォン・バックハウスの執務室だ。

『第八連隊』は通常の部隊とは違い、大きくその編成内容は異なっている。

元々、女性が多く、戦場では兵站や工作等の役割を担うことの多かった『第八連隊』であるが、先の部隊編制以来『第八連隊』はその特色をさらに色濃くすることとなった。

どうやら、アキラは戦時中のバックアップを、全てこの『第八連隊』に押し付けるつもりであるらしい。

うまい手だ。

イザベラから実質的な軍事力を削り行動を制限する一方、戦時中の役割を分担することで効率化を図っている。無論、これにも問題がないとは言えないが、今のところ打てる手段では、有効な手段の一つであることは間違いない。

「副長！ 副長！」

急ぎ『第八連隊』兵舎に向かう俺を、一人の女性士官が呼び止める。

「なんだ？」

「副長、どこへ行かれるので？」

ぴしりと敬礼して背筋を伸ばす女性士官は帯剣していない。きっと、内務専門の軍関係者だろう。

「第八連隊の兵舎だ。バックハウス大佐に用件がある」

「そ、それは……キサラギ団長の許可を取っておられるのですか？」

女性士官は、困ったように眉を寄せている。

「俺は副長だ。兵舎内を歩くのに誰の許可もいらんだろう」

「え？」

固まる女性士官。そして、なぜか嫌な予感がする。

「副長に限り、第八連隊の兵舎への出入りは禁止されていますが……」

「なんだと……！？」

俺に限り……？ 動機を伴う強い目眩を感じた。

「い、いつからだ？」

「ずいぶん前からですよ？」

アキラは何を考えているのだろう。己の片腕たる俺の行動を制限して、何か得になることでもあるのだろうか……。

頭を抱え、ふらつく俺に「失礼します」と言って女性士官は去って行く。

こんな馬鹿なことが、軍で許されているのだろうか？

いいわけがない。俺はアキラの戯言に行動を制限される必要を感じない。だが、足取りが重くなるのだけはやむを得ない。

そして俺は歩きだす。大丈夫さ、きっと。そう固く信じて。

第八連隊隊長、イザベラの執務室は、アキラのそれよりはやや小さいものの、洒落者の彼女らしく、瀟洒な仕上がりになっていた。

日光が入るように、壁には高価なガラスを多く使っており、壁紙やインテリア等にも気を使っている。兵舎としては実用的ではないが、長居する分には非常に居心地がいい。

その居心地のよい執務室の中で、イザベラ・フォン・バックハウスが、苛々とペンを片手に弄んでいる。

「なんの用？」

顔を見るなり、ご挨拶だ。めげそうになるが、言いたいことがある。ここに来たのだ。引くわけには行かない。

「先ほどの件です」

「ああ……」

イザベラは気のない返事をして、ふいつと視線を逸らす。

「会議中、発言を遮られて腹を立てるのは分かりますが、ジークは貴女にとって戦友であり、幼なじみの間柄でしょう。もう少し、柔らかな態度で」

「ジークを目茶苦茶にした、あんたにだけは言われたくないわ」
「！」

目を逸らす。イザベラの言うとおりだ。俺は付け上がっていた。その思いから、口を閉ざす。

「……………」

「ちょっと、やめなさいよ。その辛気臭い顔」

イザベラは、苛々と金髪をかきまわした。

「……あんたの言いたい事はわかってる。少し、大人気なかったかもしれないわ……でも、我慢できなかったのよ……あの、ジークの……」

そこでイザベラは言い辛そうに口ごもる。ちらちらと俺の顔を窺いながら、

「だから、もうやめなさいって。あんたは、好きでジークをあんなふうにしたんじゃないんでしょ？」

「いや、俺は……」

勿論、そうだ。しかし、あのジークを相手取り、優勢に事を進めて行く中、俺が昂揚を覚えなかったと言えば嘘になる。だからこそ、俺という男は罪深い。

イザベラは忌ま忌ましそうに言った。

「どうせ、あのおかしな猫の差し金でしょ？」
「……………」

その質問に答えることは出来ない。肯定も否定もしない俺は、き

つと卑怯者なのだ。

「だから、その泣きそうな顔……！」

イザベラはそこで押し黙り、苛々と爪で机を引っ掻いた。
目を閉じ、ひたすらイザベラの言葉を待つ。

かり。

イザベラが机を引っ掻く音が耳を衝く。

かりかりっ。

ひたすら目を閉じ、イザベラの裁きを待つ。

かりかりかりかりかりかりかりっ、かりかりかりかりかりっ、
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかりかりかりかりかりっ

何が、起こっている……？

ごくり、と唾を飲み込む。とてもでないが、目を開けることがで
きない。

目を、開けたくない……。

かりかりっかりかりっかりかりっかりかりっかりかりっかりかり
っかりかりっかりかりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかり

そして

がりっ。

「ねえ、なんで……？」

「……」

「どうして、あんたは、あのおかしな猫を選んだの？」

「……」

冷たい汗が全身に伝う。脳裏に、いつかのアキラの狂った笑みが浮かび、消えて行く。

「どうして、私を選ばなかったの？ あ那时的ように……」

また、唾を飲む。

「あ、あのとき？」

「そう、あのときのあんたは、ジークじゃなく、私を選んだ……」

なんのことだ？ だめだ。わからない。

「なんで、猫なのよ。今回も、私を選べばよかったじゃない……」

そしてまた

かりかりっかりかりかりかりかりかりかりかりかりかり……

「……そういえば、これも猫繋がりよね。偶然かしら……」

猫繋がり。そう聞いて、浮かぶのはエル顔だ。

四年前、エルの助命のために、イザベラを頼ったことを言ってるのだろうか。

ジークは優生主義だ。弱者の命に拘泥しない。消極的な態度に見切りをつけ、あの時、俺は確かに、イザベラ・フォン・バックハウスを頼った。

だが、そのことが、今、関係あるのだろうか。

「それでも、あんたのことが心配なのよ。なのになんで、なんで猫を選んだの？」

かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり

「ねえ、どうして？ どうして、私を選ばなかったの？ ねえどうして？ どうして？ ねえ、どうして？」

かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ
かりかりっ

誰か、たすけてくれ……

なぜ、こうなった……？

「あら……？」

時が止まった世界。

止めたのは、イザベラ・フォン・バックハウスだ。今の彼女からは、アキラに感じるものと同種の恐怖を感じる。

「ねえ、救急箱。大変なことになっちゃったわ」

一度、唾を飲み込み。覚悟を決めると、ゆっくりと目を開く。

そこには、右手を血まみれにしたイザベラが、薄い微笑みを浮かべていた。

狂気に彩られて、なおイザベラは美しかった。

エルフという生き物は確かに美しいが、見方を変えると、こんなにも恐ろしいものだったのだ……。

どうやら、俺は、この飛躍し過ぎた現実に着いて行けてないようだ。現実味のないこの光景に、一步も動けずにいる。

「……救急箱。治しなさい」

「は、ははははい」

くそつ、まただ。また、びびっちまつてる……。

大きく深呼吸して、動機を鎮める。『アスクラピア』の力の行使には、集中力が必要だ。

「あんたって、結構、便利よね」

挨拶をする貴夫人のように差し出されたイザベラの手を取りながら、怪我の様子を診る。

「……三枚、剥がれてます。爪の再生はできませんが、いかがなさいますか？」

「そうね……」

とイザベラは、少し思い悩む様子を見せた。

その間に、頻りに大きく呼吸して平常心を取り戻すよう努める。

大丈夫。俺は傭兵だ。血には慣れてる。

……よし。

イザベラの血に塗れた指先が、ねつとりと俺の頬に触れる。

「あんだ、私のものになりなさい。ジークはあんなだし、問題ないでしょ？」

「……」

寒気が走ったが、無視する。

血に染まった机上から、欠けた三枚の爪を拾い、イザベラの指先に押し付ける。

洒落者のイザベラだ。爪がないのは、きつかるう。その思いからの意趣返し。

「……」

激痛が走ったはずだ。だが、イザベラは眉一筋として動かさなかった。

線の細いエルフに耐えられる痛みではないはずだ。

アスクラピアの蛇が、ぞぞぞつと両腕にとぐろを巻く。

イザベラは言った。

「ねえ、私、おかしいのよ」

「……」

「あんだが、誰も好きじゃないって聞いて……ジークを壊した時も……嬉しかったの。遠慮しなくていいんだって」

それが第八連隊の解体に応じた理由であり、アキラと反目することのなかった理由なのだろうか。

ただ、俺に対する強い執着があるのだけは分かる。

アスクラピアに意識を侵されながら、ぼんやりと考える。

「あら、眠るの？」

霞む意識の向こうで、イザベラが笑う。

口元だけを歪めるその笑顔からは、よくないものしか感じない。

そして 背後のざわめきに、ふと気づき、振り返る。

青い腕章をした数人の騎士が厳しい表情でこう言った。

「レオンハルト・ベッカー少佐。風紀部の者です。あなたを拘束します」

ここにいるより、百倍いい。

そんなことを考えながら、俺は意識を手放した。

第25話 覚醒（後書き）

イ、イザベラさんが！ イザベラさんが！
このヒロインでしょうか？

第26話 営倉にて

夜。

「少佐……エルは、情けなく思っております……」

エルはいつになく、どんよりと言う。

「少佐が少し足りないお方なのは、存じているつもりでしたが……まさか、バックハウスさまと浮名を流されるとは、よもやこのエルも、思いもありませんでした……」

「だから……」

ここは第12旅団の営倉だ。懲罰房ともいう。

「なにもなかったって!」

「痴れ者は、みんなそう言うのでございます」

面会にやって来たエルの小言が始まって、早一時間余りが経過している。

「……団長から何か連絡は?」

これが一番、思いやられる。

「はい、アキラさまは、大層ご立腹のご様子でして……帰られた暁には、右腕をもらうとおっしゃっておいででした」

「み、右腕を!？」

「……お覚悟なさいますよう」

容赦なく言い放つエルの様子に、俺は頭を抱えた。

「なあ、エル。俺と亡命しないか?」

「流石は少佐。恥知らずにも程があります」

エルは格子越しに、俺の腕に残ったアスクラピアの蛇の名残を指す。

「でもまあ、蛇も無事なようですし……今回は、エルが仲立ちすることになっています」

「仲立ちって……エル、おまえは団長と仲がいいのか？」

エルは無表情で頷く。

「猫は仲間内では争いません」

「……」

また種族の習性か。

だが、確かに『猫のはつたり』という言葉がある。本来、猫という生き物はとても温厚で、喧嘩の勝敗もはつたりで決めると聞いた。本当だったのか？

アキラが温厚？ なんの冗談だろう。

「バックハウス大佐はどうなった？」

「あの方は、門閥貴族でございます」

おとがめなし、か……。

「まあ、いい。豚箱暮らしも気軽なもんだ」

「流石は、恥知らずの少佐。慣れっこというわけですか」

「まあな」

しかし、営倉入りも久々だ。

連隊時代は、再々ぶちこまれていたからな。いやはや、なつかしい。飲む打つ買うが当然だったあの頃に帰りたい。

「少佐、また恥知らずなことを考えていますね？」

今夜のエルは手厳しい。

そしてまた、一日が終わる。

営倉暮らしが三日目に入った。

最初、のほほんと構えていた俺にも、焦りが出る。

アキラの手紙には、しばらくそこにいろ、と短く書かれていた。

これが、どういうことか俺は深く考え込む嵌めになった。

何が起っているかは分からないが、今の俺はここに居た方がよい。少なくとも、アキラ・キサラギの判断ではそうだ。

俺を取り巻く状況が、著しく変化したのだ。具体的な事は何一つ分からないが、そういうことだ。

そして今のところ、アキラにはそれに対する効果的な手段がない。「こりゃ、本気の大目玉を覚悟せにやらんな……」

俺が割と本気で反省しだした頃、一つの噂が耳に入った。それは

アスペルマイヤーが俺を殺す。

というものだ。

向かいの牢に入った営倉仲間が教えてくれた。

なんだ、そんなことか。と気が抜けてしまう。ジークに殺されるのであれば、俺にとってはむしろ迎合すべきことで、思い悩む必要は何一つない。

「エルにも教えてやらんとな……」

早い者勝ちだ、と。

なにせ、命は一つしかない。目玉のように二つあればよかったが。

面会には、第七連隊の馬鹿共も訪れた。

通常、営倉では面会を許されないが、士官であり副長である俺は、

その立場上特別に許された。

「おお、神父の息子。割と独房が似合つとるな！」

「うは！ 副長！ エルフとやったって、本当ですか！？」

だが、何人かは割と心配そうな顔を見せた。

「長いな……士官のお前が、三日も営倉入りとは……マジな話、ベツカー、何をやらかしたんだ……？ 貴族のお偉いさんに手え出す程、お前に根性ないだろう」

「なんだと、根性見せてやろうか！」

いかん、むきになった。

「アスペルマイヤー伯爵に気をつけろよ。団長が営倉明けを許さんのも、そういうことだろう」

「伯爵……？ ああ、そういうことか」

アスペルマイヤーの一族郎党か。それはそうか。得心行つた。

「ここは大丈夫だとは思うが……食い物にも気をつけろよ？」

「いいんじゃないか？……べつに」

俺は神父の息子だ。神の報いを信じてる。

第27話 猫と性悪女

第12旅団の執務室では、エミリア騎士団准将アキラ・キサラギが、ぴんぴんと撥ねた癖っ毛をかき回している。

副長のレオを営倉送りにしたのは、外ならぬアキラだ。

『第八連隊』の兵舎への訪問の報を耳にしたアキラが風紀部への密告を進んで行ったのだ。

しかし、その後の経過は失笑すべきものになりつつある。

営倉にぶち込んだまではよい。アキラは腹を抱えて笑ったくらいだ。しかし、その後旅団内部で流布し出した噂。

アスペルマイヤー伯爵が、レオンハルト・ベッカーを狙っている。

アスペルマイヤー伯爵は、自慢の愛娘ジークリンデを精神の崩壊にまで追いやった者を許しはしまい。想像し得ることだった。だが、副長の彼を狙うとは……アキラの誤算はそこにある。

プライドの高い伯爵は、ジークリンデが人間に負けたことを認めはしまい。きつと、団長たる自分を狙うはず。そのときは一族郎党、皆殺しの憂き目に遭わせてやる。その目論みをあざ笑うかのように流布した噂が、元々癪性なアキラの神経を苛んでいる。

見込みが甘かった。アキラは内心臍を噛む。そして、くしゃくしゃになった髪をかき回す。

「くそ、いつもだ……！」

ミスをするときはいつも、副長のレオンハルト・ベッカーに拘わることに関してのことがほとんどだ。

レオンハルト・ベッカーが死ぬ。

そんなことは思いもしない。

そんなことは許しはしない。

レオンハルト・ベッカーが死ぬ時は、アキラ自らの手によってであるべきだ。

しかし、狼の獣人はプライドが高くしつこい。きつと執拗にレオを付け狙うだろう。

守り切れるか。

アキラの懸念は、それだけではない。

第12旅団の副長たるレオに秘密裏に届いた手紙の数々。

アルフリード、トリスタン、ノルドライン、ザールランド、諸外国からの調略の書状。

引き抜きだ。

あの『万夫不当』を模擬戦とはいえ、徹底的に打ち負かした平民出の士官、レオンハルト・ベッカーの評判はうなぎ登りだ。

どの書状を見ても、このニードーサクソンより待遇はよい。

現在、エミール騎士団は、レオを持て余している。平民出でありながら、並ならぬ軍略の才を見せた彼を、どのような地位、立場を持ってしても遇するわけにはいかないからだ。

打ち破ったのが、エミール騎士団の『万夫不当』である以上。全ての状況が、レオの出国を機としている。

「ふ、ぐっ……」

アキラは泣きそうになった。

副長たるレオを磨き上げ、力を示す機会を与えた。全部、自分でしたことだ。この状況を作ったのは、外ならぬ自分自身なのだ。

この状況をレオに教えるわけには行かない。営倉に入れたままにしてあるのはそのためだ。

入れたのはよい。だが、いかに会いたかろうが、この状況を打破する道が開けぬ限り、出すことは適わない。

まさしく泣きっ面に蜂のアキラの元へ、一人の招かれざる来客が訪れる。

イザベラ・フォン・バックハウスである。

「へえ、これが准将の……」

イザベラは、やや感心したように執務室を見回す。

「ノックくらいしろっ！」

アキラは袖で目元を擦りながら、机上の封筒をかき集める。

アキラ・キサラギの執務室は、本人の職業軍人的気質を具現化したかのように実用的なものだった。

書類の束が積み上げられた机上には、観葉植物の鉢植えが一つ。一応、応接のための長椅子やテーブルもあるが、それにしたって革張りの無骨な代物だ。洒落者のイザベラには少し気に入らない。

「しかしまあ、こんな殺風景なところで、いつも救急箱と二人で何や

ってんの？」

「き、救急箱だつて？」

問い返しながら、はらりと一枚の封筒が机を挟み、向こうへイザベラの方へ落ち、アキラは、あつと悲鳴を上げそうになった。それを見落とすイザベラではない。

「あらあらまああ」

封筒の宛て名にちらりと視線を走らせ、イザベラは、ふっと笑った。

「……おやおや、救急箱へのラブレターじゃない」

「み、見るなあっ！」

慌てて詰め寄るアキラを差し止めるように、イザベラは、すっと手を差し出す。

「その様子じゃ、ラブレターはまだありそうね」

「凶星を突かれアキラは、

「うつつ」

と立ち止まる。

「きさま！ ボクは上官だぞ！」

「それを言うなら、私はバックハウスだわ」

権威には権威。高級軍人であるアキラは軍階級を、門閥貴族であるイザベラは門地を振りかざし対抗する。

「ぐぐぐ……」

イザベラは、ここで切り捨ててよい相手ではない。ジークリンデの時と違うのは、レオがいないことだ。それが返ってアキラを冷静にさせている。

「……引き抜きか。まあ、ウチもやってることだし、卑怯ではないわね」

他国の優秀な士官を引き抜くのは、特に珍しい話ではない。そのため、イザベラに驚いた様子はない。

「それでどうするの、団長」

「なにがだ！」

アキラは憤慨して怒鳴り返す。

「これよ、これ。救急箱にはいい話よね、これ」

イザベラは、ぺらぺらと書状を振った。

「あ、あいつはボクの部下だ。ボクの勝手だろう！」

そのアキラの勝手に懸かっているのは、外ならぬ彼の命である。

そのため、アキラは齒切れが悪い。

「ふーん……」

『性悪女』イザベラ・フォン・バックハウスは、にやりと笑う。

「私が知恵を貸して上げようか？」

「おまえが……？」

アキラは怪訝に眉を寄せる。

エルフの知略は捨て難い。その提案は魅力的ではある。だが、その意図するところが分からない。不気味過ぎる。

「今の私は、とても冴えているのよ」

「……」

「私はね、貴女のこともしークのことも、これまではよく分からなかったの。でも、今はよくわかる」

「おまえに、ボクの何がわかる」

アキラは腰の刀に手を回す。今すぐイザベラを切り捨てた方がよい。本能が強く囁くのだ。イザベラ・フォン・バックハウスは危険である、と。

「ジークがなぜ、あんなに簡単に壊れちゃったのかも、今の私には、よくわかるの」

アキラは鼻を鳴らした。

「おまえの、お喋りに興味はない」

アキラの思いは、アキラだけのものだ。これがどんなに素晴らしいものであるか。それはアキラが時間を掛けて育んだものだ。それを

「おまえのような、たちの悪いエルフに、ボクが理解できるわけないだろう」

「わかるわよ！」

イザベラは喜々として言う。

「どうでもいいんでしょ？ …… のためなら、世界を焼き尽くす覚悟がある。神だって、八つ裂きにする覚悟がある。 …… 以外は、何がどうなったって構わないのよ。それを、私はついに理解したの！」

「なんだおまえ？ おまえは大概おかしいぞ？」

…… 変わった。アキラの中に直感に近い確信がある。

イザベラ・フォン・バックハウスは変わった。

アキラ・キサラギに仕える忠実な副長なら、きつとこう答えただろう。

これはこれで、もう『何者』かであるのだ、と。

第28話 月猫のワルツを

「おい、こらぼんくら」

そもそも営倉の見張りというのは、罰則で決められる。罪人の面倒は罪人で見ろということだ。

士官である俺が営倉にぶち込まれて、七日が経過しようとしている。見張り番の衛兵への呼びかけもぞんざいになろうというものだ。

「なんです、また少佐ですか？」

「またとはなんだ、このごろつきめ」

面倒臭そうにやって来た若い衛兵とのこの掛け合いも、もう四回目になる。

「お前、元傭兵だろ？」

「あれっ、わかりますか？」

「どうだ、うちの部隊に来んか？ 第七連隊は傭兵上がりが多い。

他所とは違って堅苦しくない。楽しいぞ？」

「その変わり、命の保証はない、でしょ？」

言って、にやりと笑い合う。

第七連隊は、ほとんど前線に出ずっぱりの実戦部隊だ。その分戦死者も多い。明日をも知れないやくざな戦争屋が、賑やかに、陽気に、時には残酷に命を散らすのが『第七連隊』だ。

「考えときますよ」

「おう、待ってるぞ」

しかし、ここに来て何人のごろつきを引っ張った？ もう十人は数えたぞ。

エルにはこの状況を告げてある。

一言、『急げ』と。察しのいい彼女は、それで全てを悟ったようだった。薄く笑い、

「それでは、準備をしておきましょう」
とだけ言った。

事態が動いたのは、夜も更けてからだ。

「少佐、少佐……」

呼びかける聞き慣れた声に俺は目を覚ます。

堅い寝台の上で身を起こし、鉄格子の方へ目をやるとそこには、ランプ片手にエルがこちらを見つめていた。

その隣には引つ張った若い衛兵の姿もある。

「少佐、やばい雰囲気です。逃げてください」

「伯爵の手の者か？」

俺に関する噂を知っていたのだろう。衛兵は格子の錠を開けながら、静かに頷く。

「囲まれているか？」

「いえ、その最中つてとこです。急いでください」

「すまん、恩に着る」

「それはいずれ形のあるもので……」

囁くように言い交わし、ごつんと拳をぶつけ合う。しかし……

「エル、おまえがなんでここにいる？」

「黙ってついて来いと、おっしゃったではありませんか」

頭を抱える俺に、エルが剣を突き出してくる。戦って、切り抜けるということだ。

「命の保証はないぞ？」

「はい……！」

答えたエルは、笑顔だった。

「こちらです」

衛兵の案内で営倉の裏にある馬厩へ向かう。

「ご武運を」
頷く。

追っ手は後ろよりかかる。エルを先に馬に寄せ、俺はその背後に乗り込む。

女連れか。俺も中々、洒落者だ。一つ、深呼吸して

「行くぞ、エル」

「はい……！」

気合を入れて、馬の腹を蹴飛ばす。

正面入り口の衛兵所を抜ければ、第12旅団の兵舎はすぐそこだが、そこを抜けられると思うほど、俺は馬鹿ではない。向かうのは裏手にある非常用の出入り口だ。

左手にエルを抱え、右手で馬を繰りながら、周囲を見回す。

馬廄から俄に上がった物音に反応した人影が、大声で叫びを上げた。

「いたぞ！ レオンハルト・ベッカーだ！」

正面入り口の衛兵所は篝火を焚き、一個小隊……三十人程の人数で固められている。既に制圧されてしまったらしく、衛兵の姿はない。装備にばらつきがあることから、アスペルマイヤー伯爵の私兵であることは間違いない。正規の騎士でない。おそらく傭兵だろう。その場で馬首を巡らすと、怒号を上げる追っ手に背を向け、走り出す。

小さく震えるエルを抱く腕に力を込める。

「怖いか？」

「いいえ！ いいえ！ エルは嬉しいのです！」

「よし！」

戦場の空気に当てられたか、激したエルは俺の首に手を回す。

「もっと強くつかまれ！ 振り落とされるぞ！」

「はい！」

この緊迫した空気に、俺もまた激する。

戦場の空気とはこういうものだ。生き死にを賭けた空気が、人をどこか、おかしなものにさせる。

「ああ、レオンハルトさま！ お慕いしております！」

「よし！ では地獄までついて来い！」

「はい！」

あれ？ 何か、今、どさくさに紛れて

「こつちだ！ レオンハルト・ベツカーは裏手に向かったぞ！」

新しい怒号が上がり、俺は再び、馬の腹を蹴り上げる。

蹄鉄が砂煙を巻き上げ、篝火の光が、はつきりと目に映る。裏手の非常用の門に人影は二つ。白いマントに赤いトーガを纏ったその姿は正騎士だ。敵ではないが

「おし通る！」

老朽化し、もろくなっていた門戸を突き破って飛び出す。二人の騎士は、この状況が飲み込めないらしく、大声で俺を呼び止める。

「少佐！ 短気を起こされるな！」

次の瞬間には、追って来たアスペルマイヤーの私兵と有無を言わず斬り合いになるだろう。巻き添えを食らう彼らには悪いことをした。

単騎、闇を駆ける。

このままどこへ向かうというのか。

尖った月が照らす道を砂塵と共に駆け抜けながら、俺はひたすら

この先の展望に思いを巡らせるのだった。

エルが、ぼんやりと蕩けたような視線で俺を見つめている。

「ああ……少佐……少佐は、エルのものでございます……少佐の蛇も、エルが食べてしまいたい……」

わからんことを。

俺の回りの女は、皆そうだ。理解できないことばかりを言う。街道を逸れ、細い山道に入った所で馬の歩みを緩める。

「エル、金は持って来たか？」

「はい！ ああ……はい！」

エルはまだ雰囲気当てられたままでいるようだ。ひどく興奮している。潤んだ瞳が、きらきらと月明かりに照り返り、抱いていると少しいけない気分になってしまう。

ここで一つ、決断をしなければならぬ。

旅団に帰る道を模索するか。

思い切って、このニードーサクソンを捨てるか。

地位に未練はあるし、アキラの信頼を裏切ることにも抵抗はあるが、俺が魅力を感じるのは後者の案だ。

俺が運命を変えたとしたら、今この瞬間において外よりない。

幸い、金はある。そして、今の俺はついてる。営倉の見張り番が

いい仕事をしてくれたのもあるが、あと少し手引きが遅れていれば今頃、死んでいてもおかしくない。
そのついてる俺の判断は

「エル、俺はこのまま国を捨てようと思う。また、その日暮らしの傭兵稼業に逆戻りかもしれないが、おまえも来るか」

「はい、はい……！ エルはどこまでも少佐にお供いたします！」

エルがまた、俺の首に回した腕に力を込める。

「少佐、口づけを……」

「……」

エルには命をくれてやると決めている。今更、その行為に抵抗は感じない。抱き寄せながら、

「なあ……目を閉じてくれないか……？」

「そんなことをしては、少佐の顔が見えません……」

苦笑いと共に、肩から力が抜ける。こんなことをしている場合ではないのだが

「女と一緒にとは、余裕だな。レオンハルト・ベッカー」

憎しみの籠もった低い声。

月夜が照らす一本の山道の向こうに、銀色の髪を短く刈り込んだ狼の獣人が騎乗して立ち塞がっている。

「誰だ……？」

「テオドル・フォン・アスペルマイヤー」

驚いた。伯爵本人のお出ました。

ついていると思ったが……この逃げ場のない一本道で、しかも狼の獣人の追っ手に出くわすとは……俺も相当ついてないようだ。忌ま忌ましそくに鼻を鳴らす。

「ふん、あのエルフの言う通りだったか……」

エルフ……脳裏に一瞬、イザベラの顔が浮かんで消える。

「大胆で狡猾なお前は、逃げ場のないここで追っ手をやり過ぎ……半信半疑だったが、まあいい」

こりゃあ、終わったぞ……。

苦い笑いが込み上げる。何の準備もなく、剣一本でどうにかなるほど、狼の獣人は甘くない。

そつとエルフの耳に囁く。

「……最後のチャンスだ」

エルフは、熱く悩ましい吐息を俺の耳に吹きかける。

「まだです……まだ、レオンハルトさまは輝かれます……それに……逝くときは、共にと、エルフは決めております……」

まだ頑張れということか。エルフもなかなか厳しいことを言う。しょうがない……。

それでは、精一杯の努力をするか。永遠ならざる命のために。

赤い瞳に殺意を燃やし、テオドル・フォン・アスペルマイヤーは言った。

「レオンハルト・ベッカー。おまえを殺した後、その猫の娘も殺す」
さすが狼。一度憎めば、徹底するというわけか。

だが、今の俺は時間を稼がねばならない。万が一にも希望があるとするならば、それは救援の到着だ。それに賭けるよりない。

故に、今はお喋りに興じる。

「無力な女を手にかけるとは、伯爵、狼のプライドはどこへ行かれたので？」

「ニンゲンごときが、我らの誇りの何を理解できるというのか」
素晴らしい。

テオドル・フォン・アスペルマイヤーは、狼の獣人の見本のような男だ。

誇り高く、残忍で、それでいて容赦がない。

混じり気のないそれに、感心してしまう。俺は、ここまでにはなれない。

「ジークには気の毒なことをしたと思っている。だが貴方の行動を、ジークが喜ぶとは思えない、いかが」

本心を語る。少し聞きたいこともあった。

雲の切れ目から月明かりが差し、筋骨逞しい伯爵の全身が露になる。

「あれには家督を譲ろうと思っていた。だが……ニンゲンのおまえに思いを寄せたばかりに、あの体たらく。『七度捕らえ、七度放つか。ゴキブリに虐げられた、狼の気持ちがおまえに理解できるか？』

伯爵は岩を思わせる頑強な風貌に、怒りを漲らせ、語り続ける。

「あれの恥辱を雪ぐには、おまえの断末魔をもつてほかよりない」

「俺を殺したからといって、ジークが元に戻るとは思えない」

「だが、我らの屈辱は雪がれる」

「一門、総意の決断ですか？」

「無論」

「ジークは？ 彼女がそれを」
「ジーク！」

伯爵は突然大声で喚き散らした。震える肩は今にも吹き上がりそうな怒りの奔出を予感させる。

「ジーク！ ジーク！ ジーク！ 娘を気安く呼ぶな！ ニンゲン風情が！」

この瞬間、俺は理解した。逃れられない死というものの存在を。

「連れて来い！」
「？」

伯爵が吠える。そして

じゃらり。

伯爵の背後から、重い金属質の音が響く。
数人の騎士に、大型の四足獣捕縛専用の鎖で拘束され、引き出されたのは

「ジーク！」

ここまで余程抵抗したのだろう。ジークの美しい銀髪は乱れ、衣服は所々汚れ、破れている。

「貴方という方は……！」

伯爵は狂ったように大声で笑った。

「おまえの断末魔を聞き、血を浴びれば、娘もきつと正気付く！」

ジークは、自由にならない五体を頻りに振り、牙を剥いて周囲を威嚇していたが、俺の姿を闇の中に見つけると、

「レオ？ レオだ！」

嬉しそうに天使のような笑顔を浮かべる。

胸が痛む。これは、俺がやったのだ。そして理解する。伯爵の胸の内を。

伯爵は、この胸の痛みを、きっと何度も繰り返したのだろう。

死んで当然。

だが、俺の胸の中で事の成り行きを見守るだけだった、エルが囁く。

「さあ、レオンハルトさま。戦い下さいませ、エルのために」

なんとということだろう。エルの胸には、愛と憎しみとが同居している。ここまで、彼女を歪めたのも俺だ。

俺が、やったのだ！

エルが笑う。これもまた、天使のような柔らかさをしている。

「レオンハルトさま。輝いて下さいませ、エルのために！」

俺は剣を取る。

そのときが来たのだ。

第29話 遅れた勇者と壊れそうな姫

俺は、あんまり強くない。

そもそも、この大陸においては、人間という種族は滅びつつある種だ。皆、形こそ俺と似通っているが、ドワーフやホビット、犬や猫の獣人。そんなものの血を引いている。

それらは皆、人間より強く賢い。

「どうした！ レオンハルト・ベッカー！」

伯爵にたたき伏せられた俺は、血反吐を吐き捨て、ぎゅっと拳を握り込む。

剣は、最初の一撃で弾かれ、どこか遠くに飛んで行ってしまった。どうやら伯爵は、素手で楽しみたいようだ。

……悪趣味な。そう思わずに、いられない。

遠目に、両肩を抱くようにして、うつとりとこちらを見つめるエルの姿が見える。

俺は立たねばならない。生きている限り、ゼロでない可能性に賭けねばならない。

「伯爵、少し手加減してくれませんかね……」

不敵に笑って見せる。

「まだ減らず口を叩けるか」

伯爵が地を駆け、迫って来る。

その動きは、素早すぎて残像のようにしか見えない。

俺は何度も宙に舞い、叩きつけられ、引き起こされ、そしてまた、飛ぶ。

伯爵の狂ったような笑いが耳を衝く。何か喋っているようだが、それはもう、意味を成さない音としてしか聞こえない。

俺は、あんまり賢くない。

ガキの時分、何も知らずに騎士に憧れ、何も知らずにここまでやって来た。

神父の親父は、俺には馬鹿みたいに甘かったから、

「精一杯やって来い」

とか言って、少ない金をかき集めて、送り出してくれた。

その息子が戦場で人を殺し、罪のない民間人を焼き殺したと知れば、親父はどんな顔をするだろうか。

息子が恩知らずにも裏切りの上に身を立てたと聞けば、どんな顔をするだろうか。

どこかから、哭いている声が聞こえる。

酷く苦しそうで、奥底から絞り出すような、魂の慟哭だ。

頭の奥で、少し鈍い音が聞こえた。どうやら、目が潰れたらしい。

「うあああああつ！ レオ！ レオーーーーっ！」

とても苦しそうな悲鳴だ。俺はこんなに悲しい悲鳴を聞いたことがない。

「やめて、やめて下さい！ 父上！ 私が弱いのがいけないのです！」

そんな悲しそうな声で、俺を送るのはやめてほしい。

人という生き物は、戦う者だと親父から聞いたことがある。生きている限り、立って戦わねば、その日の糧を得られないとも。俺は、立っているだろうか。

「レオ！ ああ、レオ！ もう立つな！ 立ってはいけない！」

俺はどうやら、立っている。まだ、戦えるようであるらしい。

「やめろ！ やめないか！ それ以上、レオを傷つけてみる！ 殺してやる！ 殺してやるぞおっ！」

だから……そんな苦しそうで、悲しそうな声で、俺を惜しむのはやめてほしい。

「許さない！ 許さない！ 許さない！ 絶対に殺してやる！」

ついに戦場の女神が吠えた。

銀色の髪が、月明かりに映えて美しい。

深紅の瞳に灯が灯り、月夜の闇に、鮮血の赤が、轟音と共に乱れ飛ぶ。

最後に、一つ思い出した。
親父が言っていた。

人間だけが、不可能を可能にする。

雨が降っている。

優しい雨。

暖かい雨。

「ああ、ああ！ 神さま！ 夜空に輝くあの月のように、私の命を欠いてしまってもかまわない！ だからどうか！ どうか……」

洒落たことを言うやつだ。

銀の美しい髪が、俺の頬を髑り、風に流れて行くのが見える。

「レオ、許せ！ 許せ！ 私が弱かった！」

いつか見た、戦場の女神が泣いている。優しく暖かい雨は、彼女の流した涙であるようだ。

どうやら、俺は、彼女に愛されているようだ。

「レオンハルトさま……おつかれさまでした……」

苦しい。とても、痛い。もう終わりにしてほしい。

「まだです。まだ、レオンハルトさまは、輝かれます」

そう言って、エルも泣く。女神に勝るとも劣らぬ悲しそうな表情

で。

俺はまだ踊らねばならないようだ。

くるくると回る、この猫のワルツに合わせて。

第30話 猫目石

宵闇。

薄暗い室内で、エルとアキラが激しく言い争っている。

「……ふざけるな！ キミは一体なにをしていたんだよ！」

「……」

エルは、ぼそぼそと喋る。その声は俺の耳までは届かない。

「それは……でも、まさか戻るなんて思わないだろ！？」

「……」

「うるさいな！ キミこそ、バックハウスをなんとかしたらどうなんだ！？」

何の話をしている……？

「……」

「わかった。それはなんとかしよう」

「……」

「うん……うん……そうだな。ボクらが争うのは、馬鹿らしいな」

この二人、一体どういう関係だ？

「……ジーク……危険……」

「あいつは殺しても、殺し足りないやつだ」

「……！」

「レオ！？ 目を覚ましたのか！？」

見つけた。

テオドール・フォン・アスペルマイヤー伯爵は、行方不明になった。

正気を取り戻した伯爵の実娘、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの証言では、事の露見を恐れた伯爵は、国外に逃亡したということだ。

「伯爵？ あのミンチみたいなのが、そうさ。けど、あいつ、余程、腹が立つたんだな。まあ、やつがやらないなら、ボクがするつもりだったけど」

とはアキラの談だ。

徹底的に痛め付けられた俺は左目を失い、若干ではあるものの、右足を引きずることになった。

失った左目に関してはどうにもならないが、足の方は、訓練次第で走れるようになるらしい。これもアスクラピアの神官のおかげだ。

ジークはアスペルマイヤーの門地を引き継ぐことになった。これからは、アスペルマイヤー伯、ジークリンデとなる。今は相続の続きと新しく編成された『第五連隊』のとりまとめに忙しいようで、療養所にいる俺の元へは会いに来ない。

だが、ひっきりなしに届く手紙の内容には、

逢いたい。

愛してる。

迎えに行く。

と、びっしり求愛の言葉が書き連ねられており、少し辟易してしまふ。

ジークの手紙を読んでいると、自分が女になったような気がする。

イザベラは、俺の暗殺未遂事件を経て、実父クラウディオ・フォン・バックハウスの身柄を拘束した。事件に大きく関与した疑いがある、ということらしいが、俺はこの顛末に、黒い影のようなものを感じる。

強く調査の必要を感じた俺は、そのことをアキラに具申ししたが、それは、

「あの性悪女が尻尾を出すわけないだろ？　今は休め」

と一蹴されてしまった。

現在バックハウス侯爵家の実権は、イザベラが掌握していると言っている。彼女が、ジークのように家名と門地を引き継ぐ日もそう遠くはないだろう。

模擬戦から、端を発したこの一件について、アキラは何か思うところがあるらしく、この件に関しては口が重たい。

そのアキラだが、現在、俺が休養しているこの療養所にいる。

海に近い療養所の一室では、エルが、
「どうぞ」

などと呑気に茶など振る舞っている。

アキラは、気分よさそうに茶の香りを楽しんでいるが、この光景が既に一週間連続で続いている。

「いつまでここにいろつもりですか？」

「どういう意味だ？」

アキラの眉間に、びしりと深い皺がよるが、ここで引いてはいただけない。

「団長が、なんでここにいろんですかって聞いてるんですよ」

「そんなことは関係ない。おまえは、黙ってボクを受け入れればいいんだ」

なんと横暴な……。

「旅団はどうなるんですか？ 帰った途端、書類仕事で忙殺される、なんてのは、俺は嫌ですからね？」

「しょうがないやつだ。その時は、ボクが付き合ってやる。安心しろ」

駄目だ。理屈が通用しない。

事件以来、アキラは俺の顔をまともに見ようとしないう。茶を飲んだ後、テラスに腰掛け、潮風を浴びていたが、不意に、言った。

「ボクを見る目が、半分になってしまったな」

アキラは頑なに、俺の方を見ようとはしない。

「しょうがないです。目玉一つで済んで、よしとしますよ」

「よくはない」

「まあ、そうですね。二つあるから、一個くらい、いいやつてもの

ではないですね」

自分でもよくないと思うが、こういう性分だ。のんびりと答える。

「おまえの全てはボクのものだ。流れる血も、今正に打つ鼓動の一つですらも、ボクのものであるべきだ。それが……少し欠けてしまった。この責任を、誰に取らせればいいんだ……？」

アキラが振り向く。両肩が猛烈な怒りに震え、毛が逆立っている。

「ボクが馬鹿だった……。高い授業料を払うはめになったが、もう、遠慮はしない。おまえにもだ」

強すぎる愛は、治らぬ病に似ている。

本来は、健やかであるべきはずのものが、返ってそれを危険なものにしてしまう。

「早く治せ……そろそろ、出征の気配がする……」

「はい」

アキラはまた、吹き付ける潮風の方に視線を戻す。

「旅団の正式名称を決めねばいけませんね……」

「うん……それなら……」

二人、海を見る。

「何か、案が有りですか？」

第12旅団は、あくまでも便宜上の名だ。無くともよいが、出征するとなれば、あつた方がよい。その方が皇帝の覚えがいい。アキラは、言った。

「クリソベリルキャッツアイ……」

猫目石だ。

第30話 猫目石（後書き）

投下終了。

猫は四人のヒロインが繰り広げるワルツです。主人公はそれに合わせて踊る。

テンポの早いシーンの展開が、逆に目まぐるしく感じるかもしれません。猫は最後までお付き合いいただければ嬉しいです。猫はこれにて折り返しに入ります。

次回更新は、一週間後を予定しています。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

そして、これからもよろしく願います。

皆さんの感想、待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115y/>

猫とワルツを

2011年11月21日11時36分発行